

INTERCULTURE

関西学院千里国際中等部・高等部 Senri International School of Kwansei Gakuin (SIS) | 関西学院大阪インターナショナルスクール Osaka International School of Kwansei Gakuin (OIS)
〒562-0032大阪府箕面市小野原西4-4-16 | 4-4-16 Onohara-nishi, Minoh-shi, Osaka-fu, 562-0032 JAPAN | TEL 072-727-5050 | FAX 072-727-5055 | URL <http://www.senri.ed.jp>

Sports Day "Adventure"

AISA Volleyball and Tennis

テレビ番組で授業紹介

英検1級に1名合格

FALL 2014 No.141

125
KWANSEI GAKUIN
1889-2014

Be World Citizens Creating a Bright Future.



2014/10/16 Teru Teru Bozu for Sports Day

関西学院千里国際キャンパスは、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う関西学院千里国際中等部・高等部 Senri International School of Kwansei Gakuin (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする関西学院大阪インターナショナルスクール Osaka International School of Kwansei Gakuin (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、国内外のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学3年生春学期)をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。

君を支えるために

眞砂和典
SIS校長



不器用な上に仕事の遅い私がサール前OIS校長に関する記事をタイムリーな前回のインターカルチャーに間に合わせることはできなかった。2014年7月3日に奥様と閑空から発つのを見送ってからサール校長の6年間に思いを馳せることができるようになってきた。

前日、彼の最後の出勤日は片づけで忙しそうだったが、昼食は学校の近くにできたうどん屋に二人で出かけた。取り止めもなくこの5、6年を振り返ったが、前回ふたりでうどん屋に飛び込んだのは数年前で、大変苦しい状況であったことを思い出して感慨に耽った。その時は出先でほんの少しの時間を見つけて、とりあえず立ち食いの様な所で昼食をおなかに詰め込んだ。そば好きのサールさんとうどんを食べたのはこの2回だけであった。

サール先生が2009年3月にSISの卒業式でしたスピーチを私は今でも5リスペクトの授業で使わせてもらっている。「この学校では生徒が世界を舞台にアイデアを出し、行動を起こすための準備をするという大きな夢を抱いています。それはどんなことでしょうか。」から始まって彼が毎週聞いているBBCのラジオ番組の話をした。世界を変えるようなアイデアを60秒で説明するコーナーに出てくる様々な例を紹介した。その中で、「私が最も気に入っているものは、メキシコの詩人が出した『私たちみんなが虫を食べよう』というアイデアです。なんと不思議で素晴らしい考えでしょう。なぜ虫を食べるのでしょうか？ 第一に、虫はたくさんいるので食糧問題が解決します。虫にはタンパク質が多く含まれ、おいしいのです。牛肉よりも簡単に手に入ります。一番おいしくて、大きな虫はアフリカやラテンアメリカにいます。この地域は巨大な輸出市場になるでしょう。虫による被害が減り、有害な殺虫剤も必要なくなります。… もちろん、私は虫を実際に食べたいわけではないのですが、一番気に入っているアイデアです。常識的ではないが、賢く明快な解決策です。これまで未解決のまま私たちの前にある現代の問題：気候変動とか世界的な貧困、紛争、そしてエネルギーや経済の問題を解決してしまうかもしれません。私たちは全く新しい解決策を必要とされている時代に生きています。SISとOISの生徒達が敬意に満ち、寛大で人のために尽くすとともに、このような新しいアイデアや解決策を生み出すことを期待しています。何ともわくわくする可能性に満ちているのでしょうか。しかし、同時に大きな責任もともないます。これがふたつの学校が持つ雰囲気です。」と締めくくった。その1ヶ月後の入学式(SISの現12年生の多くが7年生に入学した時です!!)で私はこの素晴らしいスピーチを紹介して、

これを英語のまま理解できるように全分野の学習をしっかりとしてほしいとお願いした。人の話を深く理解できることが本当の学力であり、それが更に能動的な力をつけることに繋がると話した。

昆虫を食料とするアイデアは本当に計画されていると今年初め頃にニュースになっていたのには大変驚かされた。先日、秋学期からの帰国生に5リスペクトの授業でこの話をした時、その生徒達はサール先生を知らなかった。サール先生とは入れ違いの生徒達だから当たり前のことなのに、私は確実に動揺した。

サール先生の後任として来られたクラロヴェック校長は若く、エネルギーで積極的に学校を良くしようと動き始めている。そのために学校中を歩き回り、生徒や教職員と話をし現状を把握することに努めている。また、日本の文化や日本語を学ぼうとする熱意は大変なものでもいつも質問を投げかけてくる。クラロヴェック先生の部屋には最初のSOIS合同職員会議で先生が書かれた「協力」という毛筆の大きな漢字が飾られている。私達はOISとSISの協力体制のひとつとしてIB(国際バカロレア)の教育手法をどのように共有していくかということもよく話し合っている。

この原稿を書いている10月19日に訃報が入って来た。関西学院とSOISの合併後に初代キャンパス長として2010年度の円滑な学校運営に尽力された佐野直克名誉教授が亡くなられたのだ。本校には2012年秋の中庭改装披露の催しに来られたのが最後であり、面識のない方もあるだろうが、理科の授業でその学問に対する情熱溢れるお人柄に接した生徒も多くなる。学校運営で大変お世話になったのはもちろんだが、楽しい実験の開発でアイデアを出し合ったことが昨日のこのように思い出される。それを地元、三田の小学生達に見せると張り切っておられた。昨年、私がお見舞いに伺った時にはとてもお元気そうで、もうすぐ退院とおっしゃっていた。関西学院とSOISを心から愛してくださったと強く感じる。告別式の読経の中に何度も「かながく」という言葉を聞き取ったので、後で位牌に近づいて確かめると戒名は「勸学院即心直道居士」であった。佐野先生の少年のような笑顔が見えた気がした。

このインターカルチャー141号の29ページに、バレエでブノア賞を受賞した卒業生の木田真理子さんからももらった手紙を掲載した。読んで頂ければわかるので改めては書かないが、彼女の5リスペクト、そして学校に対する思いには心を打たれる。

ここには4人のことしか書けなかったが、生徒の皆さんはこのように多くの学校関係者の深い思いの中に学習環境を与えられている。時間の隔たりや間接的な関わりのために表面上は気付かないかもしれないが、この校舎には深い思いがゆつくりと流れていることを忘れないでいてほしい。生徒達の成長は個々の意思だけによるものではなく、多くの深い思いによって見守り支えられているのだから。

Two Schools Together
Senri International School (SIS)
Osaka International School (OIS)
of KWANSEI GAKUIN

The 5 Respects	5つのリスペクト
Respect for Self	自分を大切にする
Respect for Others	他の人を大切にする
Respect for Learning	学習を大切にする
Respect for the Environment	環境を大切にする
Respect for Leadership / Authority	リーダーシップを大切にする

International Mindedness at SOIS

William (Bill) Kralovec

OIS Head

The concept of international mindedness is at the center of the International Baccalaureate philosophy. It is the goal of the IB to bring this out in all of our students through the Learner Profile, or what we call at OIS, the Student Learning Results (SLR). The SLR are lofty traits that all of our students and staff, from Kindergarten A through to Grade 12 aspire to. By demonstrating the traits of SLR, students nurture this idea of international mindedness. I define international mindedness not only in striving to understand other cultures and viewpoints, but also to have a deep understanding of one's own culture and history and how it relates to others.

On a daily basis, with the teaching and learning in the classroom, to our extracurricular program, to the large community events we hold on an annual basis, all these contribute to developing international mindedness. Two of the very best activities which focus on international mindedness are the international fair and the model united nations program.

Almost all international schools hold an international fair. These events feature national costumes, food, dance, etc. Some in the international community have downplayed the importance of this kind of event and claim that it is very superficial, and does not provide a deep understanding of intercultural differences. I do not think of it as superficial, but as a pathway for deeper understanding of another culture. Educational consultant Darlene Fisher recently asked what is the first thing one experiences when one travels to a new destination. "It is the sights and sounds and smells are often very different from those you are used to" It is these initial observations that things are most different on the surface - and these can provide one with very important first steps into understanding the culture of the "other". For example, why is Japan known for sushi? With a population of 146 million in a country the size of the state of California, and much of the topography mountainous, it makes sense to use rice instead of wheat as a staple grain because production yields are the greatest from a limited size field. Without much land to spare for farming, Japan gets much food



from something that is abundant, the ocean, that surrounds the islands. Hence the combination of rice and seafood tells you something about Japan.

The Model United Nations (MUN) program here at SOIS is another example of developing international mindedness. Students attending a Model UN conference are assigned a nation different from their own and in a mock general assembly, they represent the needs of that nation, pushing their agenda by proposing for and voting on different resolutions. These simulations broaden the minds of the students and help them appreciate other perspectives. OIS MUN sponsor, Ms. Tara Cheney points out the experience improves the self-confidence and public speaking skills of our students. The grade 10 students annually participate in Japan Model United Nations in Kobe and in Kyoto. Grade 11 student Lina Murray, who participated in last year's Kobe event, says "I was inspired by the ways people thought about how to solve world problems." She also learned that despite being a small country, Chile, the country she represented, has many problems. Another grade 11 student, Akira Polenghi reflected on his experience in the program, "I would say with confidence that MUN is the ultimate course of action to generate international mindedness as personal and shared knowledge is an essential factor." SIS teacher Mark Avery takes students to the Kyoto MUN conference that is designed for English Language Learners. He finds that the conference pushes his students beyond what they would normally do in the classroom, and the excitement and interaction with others is a real stimulus for the students.

SOIS continues to build international mindedness in our students and I feel this is one of the best ways we can prepare them for the interconnected, quickly changing, global economy of the future.



KWANSEI GAKUIN

Two Schools Together

Sports Day 2014



台風と雨とも闘った?! Sports Day

今年は“Adventure”というテーマで10月13日に予定されていたSports Day。てるてる坊主で好天をを祈った(表紙写真)にもかかわらず、台風のため延期されました。待ちに待った予備日の11月1日も朝から雨模様。OISの幼稚園と小学部は体育館とプールで楽しいプログラムの数々を楽しみ、その後SIS/OISの中高等部が体育館でのPerformanceで盛り上がりました。その熱気

のおかげか午後になって雨が止み、障害物競争、大縄跳び、ムカデ競争、リレーを行うことができました。

中等部は6～8年生全員を4つに分けたHouse対抗で、また9～12年生の高等部は学年対抗で、競技、Performance、ポスター、Color Spiritで競い合い、中等部はHouse 2、高等部は11年生が優勝しました。悪天候に翻弄されましたが、生徒たちは「冒険」心旺盛に闘い、そして健闘を讃え合いました。(B)



"ADVENTURE"



12年生にとって最後の体育祭が終わってしまいました。体育祭中も「これで最後」という思いでいっぱいでした。休み時間や朝学校に早く登校し、練習をしたりしている人もいました。それは全て勝つためでした。最後こそは一位になって終わらせたい。これは学年全員の願いでした。

そして体育祭当日。天気は晴れ、雨も降らず台風も来ず、まさに絶好の体育祭日和！……という風にはいきませんでした。当日はなんと雨が降ってしまい、止んでもすぐに降ったりの連続。スケジュールが変更され、パフォーマンス、障害物競争、ムカデ競争、大縄跳び、リレー3種が行われました。

開会式ではSDC(Sports Day Committee)による宣誓文、私自身も昨年SDCをやっていたので、非常に懐かしく感じました。パフォーマンスでは全ハウス、学年共々全力を出して踊りました。フィールドに移動した後はすぐに障害物競争を始めました。この障害も去年とは一部違ってユーモアを含み、私自身写真を取りながらも常に笑いが絶えませんでした。デモンストレーションをしてくれた先生にも感謝です。ムカデ競争ではチームが一丸となり一歩ずつ地面を踏みしめて前に進んで行きました。そして最後に雨で人工芝が濡れ滑りやすくなった中、リレー走者は全力でフィールドを駆け抜けました。

体育祭も終わりを迎え、いよいよ点数発表です。我々12年生はおしくも一位ではありませんでした。しかし学年全員で一丸となって何かを目指して頑張ったということは良い経験になったと思います。最後に一位を取れなかったのは悲しいですが、これも良い思い出になったと思います。

(Student Reporter F)



Two Schools Together

AISA tournaments: boys VB team “three-peats”

Peter Heimer

SOIS activities director

Sabers volleyball and tennis players completed their fall seasons, punctuated by successful showings at their respective season-ending AISA championship tournaments, October 17–18, 2014.

The girls volleyball team, with Coach Hirai and Coach Sheriff, traveled to Yokohama hoping to improve upon last year’s second place finish. The Sabers women, featuring six seniors, placed third in the AISA tournament, losing in the semifinals against a strong Yokohama International School host team before defeating Korea International School in the 3rd and 4th place playoff. Ai Kano and Shiori Hasebe were named to the all-AISA tournament team. Special congratulations to seniors Mayuri Hasegawa, Hina Kawamura, Atoka Jo, Nami Ambiru, Shiori Hasebe, and Suzuka Nakano as they wrapped up their stellar Sabers volleyball careers.

The boys volleyball team, with Coach Mitsuhashi and Coach Van Plantinga, traveled to Seoul International School as defending repeat AISA champions. The Sabers used a balance of experience and youth to “three-peat” with another dominating AISA championship. Aki Shigeyama, Leo Roberts, and Kento Moriguchi – all tenth graders – were named to the all-AISA tournament team. Special congratulations to senior captains Rintaro Miyamoto and Kota Nakayama as they wrapped up their illustrious Sabers volleyball careers.

SOIS hosted the AISA tennis tournament. For the second year in a row, the Sabers girls team finished 2nd, while the boys finished 4th. A bittersweet moment of the tournament was SIS senior Kana Yokoyama’s final match as a Sabers tennis player. Yokoyama, already a 3-time AISA champion, lost in the finals

to a very strong Seoul player, her first and only loss in an illustrious 4-year high school career. With her 4 WJAA titles and 3 AISA championships, Yokoyama wrapped up her brilliant Sabers tennis career as the most successful tennis player in Sabers history, a true Sabers champion. Special congratulations also to senior Hitomi Tomi as she, too, finished her Sabers tennis career. Thank you, Coach Entwistle and Coach Kano.

AISA EVENTS 2014-15

•January 29-February 1

basketball girls @SOIS, basketball boys @YIS, math/leadership @BSB (Beijing)

•April 9-12

soccer girls @SIS, soccer boys @KIS, swimming @SOIS



Varsity Boys Volleyball

Rintaro Miyamoto

SIS Gr.12

This year, the Varsity Boys Volleyball team aimed to win WJAA and of course a third consecutive AISA championship.



SABERS WEBSITE セイバーズのウェブサイト

Peter Heimer

SOIS activities director

チームに関するニュースやスケジュール、試合結果、オンライン・サインアップ・フォーム、承諾書、ハンドブック、ホームステイについての説明、写真、ビデオ、セイバーズテレビなど、セイバーズのスポーツに関する全ての情報は、セイバーズ・アスレティクス・ウェブサイト (sabers.senri.ed.jp) で得ることができます。ブックマークして、アクセスしてください。

Nearly all information about Sabers sports – including team news, schedules, results, online sign up and permission forms, handbooks, homestay explanations, photos, videos, Sabers TV shows – can be found on the Sabers athletics website at sabers.senri.ed.jp. Please bookmark this site and visit it often.





We won a set from KIUA, the strongest team in WJAA, but we finished 3rd in the WJAA mid-season tournament and 4th place in the final tournament. I had concerns leading into the AISA tournament which was held a week after the WJAA final tournament. However, it actually turned out to be easier than I thought to get to the finals because all players played had improved a lot from last year.

It was the 3rd time I've played in the finals of the AISA Volleyball tournament. However, this year felt completely different to the past 2 years. The team used to be the weakest team in SOIS Sabers Sports and we had only 9 players when I first joined 3 years ago. This year, we had more than 20 players and varsity players felt more responsible for winning AISA since we had won it for last two years, and I had to lead the team as a captain for the second time.

We felt that we won the championship as a team and it was the most memorable moment in my life after having a very close game against Korea International School, and earning the championship winning point (26-24) in the 4th set to win (3-1). It was the best game I've ever played since I started playing volleyball at 6 years old. I was glad that I was able to produce my best game as my last volleyball game for SOIS. We really appreciate the coaches and managers for supporting the team and giving us the most memorable season. Thank you so much, and I wish next year's team the best of luck in their pursuit for a remarkable 4th championship in a row.



Varsity Girls Volleyball

Ai Kano, 大槻咲子

OIS Gr. 11, SIS11年

From October 16th to 19th, ten selected members from both OIS and SIS grades 11 and 12, traveled to Yokohama International School (YIS) for AISA.

Compared to previous years, this year's varsity team experienced many difficulties. One of the problems was that we lost one of our starting member from an accident. She not only was a great player, but also had the ability to bring the team together. So, losing her was much bigger than just losing any other player. Another difficulty was how the seniors, having to study for exams, could not join many of the practices. Therefore, the



team had few practices where all ten members had a chance to play together. This did lead to a lack of communication, but overcoming the difficulties in WJAA led us to be a stronger team in AISA.

There were only 5 teams that participated in this year's AISA, which meant that there were no semifinals. Therefore we had to win all of the games, or have only one loss to go to the finals. We lost to MBIS and YIS, which automatically made us become 4th or 3rd. We wound up in tears when we did not make it to the finals, but were able to reset our feelings to face KIS again. The game went to the final set where we defeated them 16-14 and received 3rd place. I will never forget how everyone crowded up on the court as soon as we won and shed happy tears.

Thank you to those who supported us throughout the whole season. Special thanks to our coaches Hirai Sensei and Mr. Sheriff who taught us for almost 5 months.

10月の16から19日にかけて、横浜インターナショナルスクール(YIS)にて女子バレーボール大会が開催されました。この大会にはOISとSISの11・12年生の選ばれた10人の選手が出場しました。

今までの年と比べて、今年のパーシティは様々な困難なことを乗り越えたチームです。まず、スターティングメンバーの1人が怪我したことです。彼女はバレーボールが上手いだけではなく、チームをうまくまとめる能力を持っていました。ゆえに、彼女を失うことは、他のプレイヤーをなくす以上に影響が大きかったと思います。さらに、シニアのメンバーが受験勉強のため練習時間が限られてしまい、どうしても全員のメンバーがそろってできる練習が少なくなりました。しかし、この困難を乗り越えることによってチームワークは深まり、チームは強くなっていきました。

今回のAISAでは5校しか出場せず、全校と試合をすることができました。しかし、これはセミファイナルが無く、1敗以内ではないと決勝に進めないということでした。私たちは、予選でMBISとYISに負けたため、決勝には進めませんでした。3位決定戦相手のKISは予選のように簡単には試合を決めさせてくれず、ファイナルセットまで長引きました。私たちはこの試合を16-14で制し、3位になりました。私は試合に勝った後、みんなで集まり抱き合った光景が忘れられません。

サポートをしてくださった親、チームメイト、先生、そして平井先生とMr. Sheriffありがとうございました。

セイバーズの世界、セイバーズのスポーツマンシップ

SABERS SPIRIT, SABERS SPORTSMANSHIP

Peter Heimer

SOIS activities director

セイバーズの生徒は、いつもSOISの大使であることを覚えておかなければいけません。セイバーズ選手の行動は、良きにつけ悪しきにつけ、SOISコミュニティー全体を反映するものです。セイバーズ選手は常に最高の水準の行動をとりましょう。それは、「セイバーズ・スピリット」の一環でもあります。

スポーツマンシップには、貧しいスポーツマンシップ、良いスポーツマンシップ、そしてセイバーズ・スポーツマンシップの3種類があります。セイバーズ・スポーツマンシップは、セイバーズ・スピリットに不可欠な要素であり、セイバーズのチームやコーチ、保護者、ファンから最高の水準のスポーツマンシップが期待されています。

セイバーズ・スピリット、およびセイバーズ・スポーツマンシップの特徴、具体的な行動は次のようになります。

1. 準備万端: 練習や試合に100%出席し、努力する。栄養面や精神的な集中、チームへの献身的な態度
2. チーム、個人のプライド: プレー中、身だしなみや行動、交通機関やレストランなど公共の場やイベントにおける適切な服装、ふさわしい行動
3. しかるべき敬意: チームメイトやマネージャー、コーチ、職員、対戦相手、試合に対して
4. 絶え間ない競争力: 最後まで戦う、あきらめない、こぼれ球を取りに行く、責任を持つ、ゴールまで全力疾走する
5. 冷静さ: 審判や対戦相手、ファン、チームメイト、コーチと議論や喧嘩はしない、審判やコーチの決定に苦情を申し立てない、“悪いプレー”を止める、自分自身やチームメイトを非難しない
6. 思いやりを持つ: 相手選手やコーチと、試合の前と後に握手をする、職員やコーチにお辞儀をする、嘲りをしない、(バスケットボールのフリースローやサッカーのペナルティーキック、一塁からのリードなど)いかなる状況においてもやじやブーイングをしない
7. 個人的な謙虚さ: 自慢や自己顕示をしない、他のチームに見せびらかすことをしない
8. 丁寧な心遣い: 静かに注意を払う、体育館やロッカーに落ちているゴミを拾う、体育館内では外用の靴を履かない、許可がない限りは飲食物を持ち込まない、電車でお年寄りに席を譲る、ドアを他の人のために開けておく、適切な場所、場合に脱帽する、注意深く人の話を聞く
9. 適切な言葉遣い: いかなる場所、時も罵らない—廊下や練習中、試合中、電車の中で、Facebook上の写真を含めてわいせつなジェスチャーをしない
10. 倫理的な行動: 不正行為や嘘、いじめ、しごきをしない、授業をさぼらない
11. 合法的な行動: 酒やタバコ、ドラッグ、盗み、破壊行為とは関わらない
12. 道徳的な行動規範: 正しいことをする、黄金律「あなたが人にしてもらいたいように、あなたも人にしなさい」に従う

セイバーズ全員が、セイバーズ・スポーツマンシップ・ガイドラインを読み、ウェブサイト(Sabers website)にあるオンライン版の合意書(online agreement form)に記入し、同意しなければいけません。

Sabers students must always remember that they are ambassadors of SOIS. Sabers behavior – both good and bad – reflects on the entire SOIS community. Sabers students hold themselves to the highest standards of behavior. Doing so is part of our “Sabers Spirit.”

There are three kinds of sportsmanship: poor sportsmanship, good sportsmanship, and Sabers Sportsmanship. Sabers Sportsmanship, an integral part of Sabers Spirit, is the highest level of sportsmanship and is expected of all Sabers teams, coaches, parents, and fans at all times.

Some characteristics and behaviors of Sabers Spirit and Sabers Sportsmanship include:

1. complete preparation: 100% effort and attendance at practice and games; proper nutrition; mental concentration; commitment to the team
2. team and personal pride: while playing; in appearance and conduct – proper dress code for events and proper behavior in public (transportation, restaurants, etc.)
3. proper respect: to teammates, managers, coaches, officials, opponents, the game
4. relentless competitiveness: “fight to the end”; do not give up; dive for loose balls; take the charge; sprint to the finish
5. calm composure: no arguing and no fighting – with referees or opponents or fans or teammates or coaches; no complaining about referees’ or coaches’ decisions; “shake off” bad plays; do not get down on yourself or on teammates
6. thoughtful compassion: shake hands with opposing players and coaches before and after games; bow to officials and coaches; no taunting; do not jeer or boo (at any time – during basketball free throws, soccer penalty kicks, or while leading off first base); pick up a fallen player
7. personal modesty: no boasting or showing off; no “showing up” the other team
8. polite consideration: quiet attention; pick up trash in gym and locker rooms; no outdoor shoes or food or drink in gym unless allowed; give up train seats to the elderly; hold the door open for others; take off your hat when appropriate; listen attentively
9. appropriate language: no swearing anywhere, anytime – in the hallways, at practice, in a game, on the train; no obscene gestures anywhere, anytime (including Facebook photos)
10. ethical behavior: no cheating or lying; no bullying or hazing; no skipping classes
11. legal behavior: no alcohol, no smoking, no drugs, no stealing, no vandalism
12. a moral code: “do the right thing”; follow the Golden Rule: “Do unto others as you would have them do unto you.”

All Sabers must read and agree to follow these Sabers Sportsmanship guidelines by completing the online agreement form on the Sabers website.

Two Schools Together

15 People Place in Suita City Triathlon/Aquathlon



40 finishers at Suita Triathlon/Aquathlon

馬場博史 Hiroshi Baba

Triathlon/Running Coach, SIS Math

(以下Track&Fieldは複数参加のBest Recordsのみ)

■6/7 (Sat) 中体連陸上豊能地区大会(服部緑地競技場)

Toyono District Track & Field Meet at Hattori Stadium in Toyonaka-shi. A total of 11 students participated.

<Finalist> Girls 1500m: 仮屋風香 Fuka Kariya (SIS9) 5'26"

<Preliminary> 1500m: 馬場優人 Yuto Baba(OIS8) 4'59", 800m: ハント ブランドン Brandon Bunt (OIS8) 2'36", 藤戸美妃 Miki Fujito (SIS8) 2'43"

■6/28 (Sat) 中体連陸上豊中大会(服部緑地競技場)

Chutairen Toyonaka Track & Field Meet at Hattori Stadium. A total of 9 students participated.

800m: 谷内拳 Ken Taniuchi (SIS8) 2'22", 仮屋璃香 Rika Kariya (SIS7) 2'47", 1500m: 吉村拓真 Takuma Yoshimura 5'16", 仮屋風香 Fuka Kariya 1500m 5'36"

■7/21 (Mon) 明石アクアスロン(明石大蔵海岸)

Akashi Aquathlon at Akashi Okura Beach. A total of 5 people participated.

■7/28 (Mon) 中体連陸上箕面池田大会(服部緑地競技場)

Chutairen Minoh-Ikeda Track & Field Meet at Hattori Stadium. A total of 7 students participated.

1500m: 馬場優人 Yuto Baba (OIS8) 5'04", 仮屋風香 Fuka Kariya (SIS9) 5'49", 800m: 藤戸美妃 Miki Fujito (SIS8) 2'51"

■8/23 (Sat) 中体連陸上豊能地区大会(服部緑地競技場)

Chutairen Toyono district Track & Field Meet at Hattori Stadium. A total of 10 students participated.

800m: 谷内拳 Ken Taniuchi (SIS8) 2'30"43, 藤戸美妃 Miki Fujito (SIS8) 2'57"04, 1500m: 吉村拓真 Takuma Yoshimura (SIS7) 5'50"66, 鳥枝樹里亜 Juria Torieda (SIS7) 6'22"71, 3000m: 藤森史恩 Shion Fujimori (SIS9) 12'13"

■8/24 (Sun) 京都アクアスロン(京都アクアリーナ)

Kyoto Aquathlon at Kyoto Aquarena. A total of 3 students participated.

■9/7 (Sun) 吹田市長杯トライアスロン(千里北公園)

Suita Triathlon/Aquathlon was held at Senri Kita Koen. A total of 15 people awarded out of 40 participants of SOIS. Gerardo Takeuchi (SIS11) got big trophy in the main race.

<Triathlon S500mB10kmR2.8km> Gr7-9 Girls: 1st 藤戸美妃 Miki Fujito (SIS8), 3rd キャザード ケイトリン Caitlin Gazzard (SIS7), Gr7-9 Boys: 3rd 藤森史恩 Shion Fujimori (SIS9)

<Triathlon S750mB20kmR5.6km>

Gr10-Age39 Male: 1st 竹内ヘルルド Gerardo Takeuchi (SIS11)

<Aquathlon S125mR1.4km> Gr3 Boys: 3rd 田水サム Sam Tamizu (OIS3), Gr4 Boys: 2nd 田水ハリ Harry Tamizu (OIS5)

<Aquathlon S500mR2.8km> Gr7-9

Girls: 1st 鳥枝樹里亜 Juria Torieda (SIS7), 2nd 武田七海 Natsumi Takeda (SIS8), 3rd 池田絢 Aya Ikeda (SIS7), Gr7-9 Boys: 2nd 馬場優人 Yuto Baba (OIS9), 3rd 田中祐太郎 Yutaro Tanaka (SIS8), Gr10-Age39 Female: 1st 藤崎麻理香 Marika Fujisaki (Graduate), Gr10-Age39 Male: 1st 向山りおん Lion Mukaiyama (SIS12), 2nd 奥野ニール Neal Okuno (SIS11)

<LDswim 1500m> Female: 1st 宮脇千恵美 Chiemi Miyawaki (Parent)

■10/19 (Sun) 吹田市長杯陸上競技大会(吹田市総合運動場)

Suita City mayor's Cup Track and Field Meet was held at Suita-shi Sogo Undojo. In total 19 people participated and 3 students placed. 200m: 2nd 平野菜翼 Natsu Hirano (SIS11), 3000m: 3rd 馬場優人 Yuto Baba (OIS9), High Jump: 1st, Long Jump: 2nd 藤田カイ Kai Fujita (SIS9)



Two Schools Together

Grade 7 Science and Art trip at Kaiyukan

September 17, 2014

Richard Fitzpatrick

OIS Science

What a relief! The weather has held.

On a truly glorious mid-September day the entire grade 7 (both OIS and SIS classes) embarked on their annual science and art interdisciplinary field trip, accompanied by faculty members from their respective home rooms, science and art classes. This year the chosen venue for this excursion was a little closer to home, but no less educationally rich, the Osaka Aquarium and Tempozan Harbour Village area.

As the buses arrived the 101 students were divided into their groups for the day and then guided to their designated vehicle. During the journey south to the central Osaka venue the groups were informed who would be beginning their day exploring the aquarium and who would be using the time up until lunch honing their artistic skills as they focused on the surrounding areas. Once there, the two groups went their separate ways, knowing they would see each other again at lunch.

Inside the aquarium, in addition to simply marveling at the huge diversity of organisms on display, the students were asked to focus on observing the multitude of different animals in their respective habitats and explaining how their adaptations enable them to survive and thrive in these conditions. The route snaked through the building taking everyone passed the gargantuan Pirarucu, an air breathing fish.

*(the Pirarucu).*

After this came the ever playful mammals of the sealions, seals and dolphins, which were followed by the penguins. All of which were a mere warm up for the main event of the pacific tank which contained the newly acquired Whale Shark, hammerhead sharks and several different schools of fish.

Beyond this point the interest didn't wane as the students passed the terrifying giant crabs and then just finally stroking a stingray before it was time to move on.

*(the grade 7 students pose in front of a narwhal)*

Upon leaving the aquarium the students had their lunch which was followed by their art session which was run by Mr. Myers and Mr. Deiterly.

As the weather had remained beautifully sunny throughout

the day it was possible to complete this activity outside overlooking the bay area, right by the docking point of the Santa Maria (which several people chose to include in their art work). During this session the students applied skills that they had learned in the classroom to create a detailed landscape drawing of a section of what they could see by using different levels of contrast and shading to indicate the differences between background and foreground. This activity led to the exploration of how what they saw inside and outside the aquarium could be applied to creating a 3D landscape from their imagination.

*(The Santa Maria)**(Students hard at work on their art task)*

At the end of the day, once all students had experienced both activities it was time to leave the Tempozan Harbour Area, but there was still time for one final treat on the way back to the buses, as the students passed a juggling street performer. There was lots of both science and art on display here but the students were content to simply watch the performer carry out his show.



校外学習という名前はあるものの、生徒たちにとっては半分遠足気分。私も同様だと思っていましたが、実際に訪れてみると、この校外学習がどんな意味を持つのか理解することができました。それは必ずしも学習面だけのことではありませんでした。9月になって初めて授業を共に受けるようになったOISの生徒たち。彼らと1日中行動を共にするのはこれが初めてでしたが、私はこの校外学習で、彼らから実に多くのことを学ばせていただきました。私の想像よりも価値観やものの見方、考え方が違っていました。私が考えていた以上にこの校外学習は価値のあるものでした。また、理科や美術では校外学習での学びを反映させた授業もあり、この校外学習は私たちにとって大いに意味のあるものだったと思います。

(Student Reporter A)

Two Schools Together

東北ボランティア Volunteer Trip to Tohoku

石川ミラ
SIS12年

私たち生徒19名、教員2名は東日本大震災の復興支援のため、仙台市へ足を運んだ。活動の拠点としたのは、宮城県の沿岸部に位置する名取市の閑上だった。初日に観光した仙台駅付近とは違って、2日目に語りべさん(地元の人)に案内、そして説明してもらった沿岸部の景色は、まだまだすべきことがあるという事実を私たちに気づかせてくれた。語りべさんの説明から、震災は建物だけではなく人の心にも

大きな傷跡を残したということがわかった。その傷跡は、目に見える街の復興とは違い、時間や人の手で治すことはできないため、「心のケア」として大人から子供までを対象としたカウンセリングなども行われていることをも知った。2日目から4日目にかけては、主に草むしりや瓦礫の収集・分別などの作業をした。天候にも恵まれ、それぞれがもつ想いととも作業を終えることができた。

3年もの年月が経過し、大半は復興していると思って足を運んだ者も中にはいたがニュースとは真逆の現状を目の当たりにした。東北についてのメディアが取り上げる話題は原発の内容が多いが、取り上げられていない沿岸部などが必ずしも復興に成功しているとは限らないということを学んだ。そこで、それぞれの生徒が感じたことは、日本はここまでテクノロジーが進んでいるのにも関わらず、被害が大きかったこと、人々の「自分は大丈夫だ」という油断が被害を拡大させたこと、現地の方々の「過去を受け入れ、それを人々に伝える」という精神の強さ、「心のケア」の必要性、「立ち向かうこと」「歴史から学ぶこと」の大切さ。そして、最後にまだ何も終わってないということである。

語りべさんが言っていたように、復興というものは早い方がいいのか時間を掛けた方がいいのかは誰にも分からない。しかし、ボランティアの継続の重要性を学んだ私たちが今すべきことは、私たちの見た光景、聞いた話を広めること、募金などの現地にいなくてもできる支援活動を見つけること、そして、いくら時間が経っても「2011年3月11日」を忘れないことである。誰でも、どこからでも、できる活動はある。



Chihiro Okada
OIS Gr.12

In a collaborative volunteer trip between SIS and OIS, we headed to the northeast area of Japan, Tohoku. Specifically, we were able to stay at the city of Sendai. Most of the work took place in Yuriage, a town outside of Sendai, where we went for the first time on our second day of the trip. We were able to listen to a local man talk about his personal experience. Listening to a person who was directly affected by the disaster tell his story, we all knew that the restoration process of the area was far from over. One particular thing he told us stuck out for me. He



told us the importance of what we do, and also how important it was for us to tell everyone what we saw and felt, because these were things that can only be experienced first hand, and we were fortunate



enough to go there and volunteer. So instead of listing out everything we did day-by-day, I would like to write a fraction of my personal experience there.

For many students, it was not the first time volunteering in the area, but for students like me who have never been there, it came as quite a shock to see a plot of land taken over by nature that was a town, a community with people and their houses. Since the news does not report as much on the consequences of the disaster, I think it is safe to say that many of us thought that the area had recovered much more than what we actually saw. However, some of us found that there were still personal belongings on the ground; most likely left untouched from the time the tsunami hit on March 11th, 2011. Something in particular really woke me up, and it was a CD of a band that I was familiar with. From this moment, I realized that the people affected were real, not just people on TV. These people were people like us, living normal lives like us, until a tsunami wiped away most of what was there, and what the people had.

We gained much more than we had hoped for, and definitely more than what we were able to do there. We learned that every little bit of volunteer work helps, not just physically but also mentally as well. The fact that there are people out there still willing to volunteer is just as important to them as doing the work itself. I am sure that I'm not the only one that has "slept" on this issue, and I hope that stories like these are able to wake people up to the truth, and that it helps us continue to help those that were affected by the disaster.

Two Schools Together

Die Studienreise nach Deutschland



福島浩介
SIS国語科

7月13日から26日の二週間、OIS高校生1人、SIS高校生11人、ドイツ語のWeiner先生と福島の教員2名の合計14人でドイツはミュンヘンへの研修旅行へ参りました。ドイツがワールドカップ優勝を決めた翌日に到着でした。ドイツ側でこの交流を担当してくださっているロスレー先生には、今回も大変お世話になりました。

前半は、全員がユースホステルに滞在し、ミュンヘンでダッハウの強制収容所博物館や美術館、博物館、また一日かけて電車で隣のオーストリアはザルツブルグへ遠足したりしました。

後半、生徒諸君はホームステイに入り、グラーフインギムナジュームの学園祭と運動会がありました。学園祭では、日本語科のブースをお手伝いし、生徒諸君が作った折り紙や日本語が書いてあるしおりを販売する横で、持参した白い団扇や扇子に、毛筆を使ってドイツ人の名前を、漢字の当て字で書き販売しました。

運動会は、日本の学校とは少し違って、いくつかの会場でいろいろな種目を行っていて、生徒は選んだ種目に参加するというスタイルです。私たちは盆踊りを教えるという会場を設けて、SOISからの参加者とドイツ人生徒と一緒に炭坑節を踊りました。

ドイツ、そしてバイエルン州の文化、そして人々を実際に肌身で知ることのできるこの研修旅行はとても意義のあることだと思います。また、公共の交通機関を使い、ユースホステルに泊まるという、より現地に密着した旅は、おそらくほかの多くの学校では学校側として「不安で」なかなか実施できないのではないのでしょうか？

この旅行に際して、私自身、二年前よりは少し多めにドイツ語を話しました。高等部では、毎年春学期から新たに第二外国語を学び始めることができますので、隔年ではありますが、この旅行に

参加するために、またミュンヘンからの生徒たちを受け入れるために、大きなことを言うと、今まさに日本で必要とされる、リサイクルや原子力発電に関することなどを学ぶためにドイツ語の学習を開始する生徒がもっと増えるとよいな、と思います。

今後もこの交流を継続・発展させていきたいと思います。また、Weiner先生は今回の旅行の引率を最後に、ドイツへお帰りになり、新たにHinsken先生がドイツ語を教えることになりましたが、Hinsken先生はミュンヘンのご出身ですので、次回に訪問する際には更に深い旅行が計画出来ると思います。

三年前、去年同様、来年度はまたミュンヘンの高校生グループにSOISを訪問して貰えるように計画していますが、この交流に多くの人が参加してくれることを期待しています。

さて、以下に、実際に参加してくれた、ナガサカハナミさんとWeiner先生の文章を掲載します。



INTERCULTURAL TRIP TO GERMANY

Hanami Nagasaka

OIS Gr.11

In this year's summer vacation a group of SOIS students, teachers, and I visited Munich, Germany for two weeks. During the first week, we went sight seeing and visited well-known places, like the Dahau Concentration Camp, Marienplatz, Pina-kothek, and we also got the chance to visit Salzburg, Austria. On the second week we had homestays.

On the first week, we stayed at a youth hostel and we went to the different sight-seeing spots by train and by foot. Even with just this experience I was already able see how different Germany was to Japan. This is because in the hostel they would serve us German style breakfast, which included different types of bread, cheese, cold cuts, and jam/honey. Because we rode the train everyday as our means of transportation, I saw how different Germany's train system is compared to the ones they have here in Japan. For example, the doors there are not automatic, so every time you want to go out you must slide the door open for yourself. Also, no one really checks if you have a train ticket or not, so if you're lucky, you can get away with riding the train even without buying a ticket.

We were also given the chance to visit different types of museums: Egyptian, Greek, German, and Art. Because of this experience we were able to learn a lot about their history and what their culture is like. For example in the Egypt museum

we saw how their ancient architecture looked and in the Greek museums we saw a lot of sculptures about their war. We also went to the Dachau Concentration camp and although this isn't a museum, I learned a lot about the German history because we were able to see what the prisoners went through and how they were treated. We also learned about the Austrian culture because when we visited Salzburg we went to old castles and we also had a look around Mozart's house.

On the second week, we had homestays and we had to follow our homestay buddies to school everyday and also attend their classes. This experience allowed us to see the differences between Germany's and Japan's school systems. For example, I learned that in Germany, school ends at different times according to the day. It can end from as early as 12p.m to as late as 5p.m. In school they mostly speak German but some of the students prefer to speak Bavarian outside classes rather than German. My host family also took me to the BMW museums and treated me to traditional Bavarian restaurants. I thought this experience was really important because not only was I able to see different types of cars and enjoy great food but the German architecture of the museum amazed me and I learned that even after all these years Bavarian culture is still strong.

All in all, this trip was intercultural because not only were we able to learn about the history and cultures of Germany and Bavaria but we also got to learn about the cultures of Greece, Egypt, and Austria. During this trip we learned more about the history and cultures by visiting different types of museum, having homestays, and visiting castles.



Trip to Munich from July 13th to 26th

Katja Weiner

German

July 13th/14th

On Sunday July 13th we met at the Kansai International Airport around 8:30pm with the students and took the flight to Munich and arrived on April 14th around 1pm in Germany. After a short trip with the S-Bahn to central Munich, we arrived at the youth hostel München Park and got our rooms. The hostel was clean and the staff really helpful and friendly. In the evening the kids walked around the area of the hostel and discovered the surrounding supermarkets.

July 15th

Luckily we had really good weather all day long and first went to central Munich and did a little sightseeing around the Marienplatz. After taking a look around we went to the Königsplatz with the Glyptothek. The Königsplatz is surrounded by many buildings from the ancient world, for example the Propylaea, a city gate, the State Collections of Antiques and the Glyptothek. After a walk around this area, some students visited the Egyptian museum with us and others went back to the city for shopping. Most of the facilities in Munich are free of charge for kids up to 16 years so the students saved some money.

July 16th

Wednesday we went to the Deutsches Museum, located on

a small island in the Isar river. The museum is the largest for science and technology in the world. Permanent exhibitions include for example Ceramics, Chemistry, Chronometry, Computers or Energy Technology.

The museum is large enough to spend a few days in and the students enjoyed the museum and walked through the exhibitions, had a coffee and something to eat.

Later that day we went to the Pinakothek der Moderne, a Gallery of Modern Art. We were very lucky that day because Wednesdays are free of charge, because they are funded by the Allianz insurance.

The museum itself combines four independent museums: the Sammlung Moderne Kunst, Die Neue Sammlung – The International Design Museum Munich, the Architekturmuseum der Technischen Universität München and the Staatliche Graphische Sammlung. Students were very interested in modern art so they took a walk through the many museums.

July 17th

We went to the Dachau concentration camp memorial site. Students had 1.5 hour to walk through the camp side. They could see the old prison cells, the history of the prisoners, the rooms where the prisoners lived, gas chambers, furnaces, etc.

I preferred to walk around alone. The students also walked in little groups and some of them were shocked, especially by the photos of prisoners and their stories.

After leaving the camp the students could decide if they wanted to take a day off or go to Bad Tölz with us. Bad Tölz is a small town 50 kilometers away from Munich. Two students joined us on the trip and we spent a day with delicious food and ice cream, hiking around the town and visits to different churches in Bad Tölz.

July 18th

This day was the last day before the students met their homestay families and we spent it in Salzburg, Austria. The train ride takes about three hours from Munich. The main sightseeing spots in Salzburg are the old town and the castle Hohensalzburg. When we arrived on top of the Hohensalzburg we gave the students some time off.

On July 19th the kids met their families and Fukushima-sensei and I went to our hotel at the Goetheplatz. During the last week my family visited me and we did a little sightseeing. On July 25th we left Munich around 4pm and arrived in Osaka on Saturday 26th in the evening.

I think the kids had a lot of fun with their families and in Munich. We were really lucky with the weather. Fukushima-sensei and I had absolutely no problems during the trip. I really hope that the kids enjoyed this trip to the extent that they will continue German next trimester or maybe later. I wish them all the best!



Two Schools Together

SOIS & OIS Students Collaborate on Literacy Project

Lora Vimont

OIS Grade 4 Teacher

The SOIS High School Children's Literature class and the OIS Grade 4 students have joined forces this year as they have done in past years for a collaborative literacy project focusing on the interpretation, creation and ultimate sharing of original children's books. Under the supervision of SOIS High School English teacher Mark Avery and OIS Grade 4 teacher Lora Vimont, the students meet up for four sessions over a 2 month period to engage in a variety of cooperative language activities. The first session involves the SOIS students observing a teacher-guided reading lesson and then working alongside with individual OIS students to explore the idea of how powerful images can help an author tell a story. Using the children's book The Mysteries of Harris Burdick by author/illustrator Chris van Allsburg, students work in small groups to inquire into, create and share a story using only a single picture taken from the book. In the second session, SOIS students prepare storyboarding and dramatic performance activities to engage the Grade 4s in another Chris van Allsburg book, The Wretched Stone. The third session allows for the older students to try out some of their own literature-based activities on the Grade 4s to gain a better sense of their language



abilities and preferences. After this, the SOIS students go off to work on creating their own children's books. Ultimately in the fourth session, the SOIS students are given the opportunity to share their creations with the Grade 4s who are then asked to give their feedback. Not only is this a fun collaborative time for all, but also an excellent way for both groups to gain perspectives in literature that otherwise could not be gotten in the regular classroom experience!

この授業がテレビ番組で紹介されました

世界でいちばん受けたい授業

井藤真由美

SIS教頭

SIS高等部の数多くある英語選択授業のひとつ、Mr Averyが担当するChildren's Literatureでは、SIS高校生とOIS4年生が、絵本を題材に様々な共同プロジェクトに取り組んでいます。OISとSIS、高校生と小学生、のコラボというSOISキャンパスならではの授業です。

10月11日(土)の日本テレビ「世界でいちばん受けたい授業」スペシャル番組でこの授業の一部が紹介されました。二年前に法政大学からの教育実習生の指導教官として本校を訪問・見学してくださった、尾木ママこと尾木直樹先生が「是非とも」と推薦してくださったことで、実現しました。尾木先生ありがとうございました！

Two Schools Together Eiken Report 英検1級に1名合格



Rodney Ray

SIS English

The following students have recently reported their results on the Society for Testing English Proficiency's (STEP) Test in Practical English Proficiency (Eiken). We had a large group of students passing the test at Level 2 this time. Special congratulations to SIS Gr11 Sayu Fujii, who passed the Level 1 examination!

Good job everybody! Remember, if you take the Eiken, be sure to report your results to Iihara-san in the Business Office.

School	Grade	Student Name	氏名	Level
SIS	11	Fujii, Sayu	藤井 彩由	1級 (Level 1)
SIS	09	Miyazaki, Mana	宮崎 真奈	2級 (Level 2)
SIS	09	Shiba, Hanami	志波 花実	2級 (Level 2)
SIS	11	Chisoku, Miki	千足 美樹	2級 (Level 2)
SIS	11	Kitano, Yuya	北野 裕也	2級 (Level 2)
SIS	12	Ueda, Rurika	上田 瑠里華	2級 (Level 2)
SIS	12	Nakajima, Akane	中島 茜音	2級 (Level 2)
SIS	12	Yata, Urara	矢田 うらら	2級 (Level 2)
SIS	12	Kobayashi, Kota	小林 耕太	2級 (Level 2)
SIS	12	Yamamoto, Mizuki	山本 美月	2級 (Level 2)
SIS	12	Hori, Saki	堀 早来	2級 (Level 2)
SIS	12	Kashima, Ayumi	加島 あゆみ	2級 (Level 2)
SIS	12	Shintani, Yuki	新谷 勇樹	2級 (Level 2)
SIS	12	Yoshida, Hanae	吉田 華恵	2級 (Level 2)
OIS	05	Utsugi, Aoto		2級 (Level 2)

Two Schools Together 通年クラブ・同好会大集合!

Sports Dayも終わり、季節も秋らしく(?)なってきましたね! 新しくこの学校に加わった人や、OISでmiddle schoolになった人の中で「そろそろクラブ始めてみよっかな～」と思っている人もいないでしょうか。そんなあなたに通年のクラブ、同好会を紹介したいと思います!

このなかでも秋号は料理部、社会科研究会、Tango、点字部について紹介したいと思います! そのほかのクラブは冬号、春号に掲載するのでおたのしみ!

(Student Reporter M)

料理部

毎週火曜日に15:50頃～17:50頃HFL室でやっているクラブです。一回の活動につき2,3種類のメニューを作ります。学園祭には毎年ハヤシライスを出しています。料理部だけのお菓子も作るよ\(^)/学園をこえてみんなで仲良く料理をします。みんなのリクエストのあった料理を作る、ゆるくて楽しいクラブですよ^ 入部したいという人は志垣先生かSIS11年生の田中沙宝さんまで♪



点字部

毎週水曜日に15:30～18:00の中で時間帯を決めてマルチメディアラボで活動しているクラブです。普段は点字の練習や、絵本の点訳をして、学園祭では点字を教えるブースを開いています。初心者でも何もわからなくても大歓迎! 楽しい点字の世界を体験してみませんか? 入部したいという人は青山先生かSIS11年生の出田涼子さんまで♪



Tango

This club meets every Wednesday from 15:45-16:15. We publish the Tango newspaper, and run the Tango board. We put up advertisements, encouraging people to read the paper and join the club. If you are interested, please ask Mr. Algie or Hannah Yamamoto in OIS G11.



社会科研究会

毎週火曜日に15:45～16:30に活動しているクラブです。時事問題についてのディベートをしたり、学期末にはその学期のニュースのおさらいをしています。楽しく社会科を学びたい人、プレゼンの練習をしたい人、のんびり部活動をしたい人はぜひ来てください。入部したいという人は野島先生かSIS12年生の高橋弥生さんまで♪



照明スタッフ募集中♪

皆さんはASPやInternational Fairで公演される劇、そしてOISの卒業式などで舞台照明が使われているのをしていますか? あれは実はボランティアで生徒が行っているのです! 照明のスタッフさんはいつもシアターの二階部分(舞台側から見ると時計の上にあります)で仕事をします。仕込みの段階では二階部分からさらにシアターの天井裏にある照明器具たちを調節するために天井裏にのぼることもあります。(ハイスクールの生徒に限る)そこで機械が大好きな人、照明に興味のある人は照明スタッフにチャレンジしてみても? 照明を使う行事の少し前と本番に仕事をするので毎週何かをする、というわけではありません。興味のある人は大迫先生 nosako@senri.ed.jpまで♪

通年クラブ・同好会一覧

月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	その他
・Triathlon	・茶道部	・点字部	・Team science	・ダンス部	・APC(不定期)
・English Drama Club	・美術部	・Running	・A la mode	・演劇部	・Love is all
	・Team Science	・English Drama Club	・ダンス部	・Running	(日曜日
	・料理部		・Triathlon	・English Drama Club	月1回)
	・ダンス部		・(お菓子部)	・鉄道研究会	・Tango
	・Running			・映画同好会	(放課後)
	・Triathlon				・GNS(週1)
	・年間バトミントン(朝)				・年間バトミントン(放課後)
	・お菓子部				
	・短編映画製作				
	・社会科研究会				

Two Schools Together New Faculty

Ayumi Wantabe is working in the elementary school Japanese language department. She is from Osaka and has a Bachelor's Degree from the College of International Language from Kansai Gaidai and a Masters of Education in Language and Culture Education from Hiroshima University. She previously taught in South Korea as a Japanese Language Teacher. Her hobbies include basketball, volleyball, yoga, and she enjoys travelling.



Esperanza (Espie) Garces is from Cebu City in the Philippines. She has a Bachelor of Fine Arts from the University of the Philippines and is highly trained in the International Baccalaureate Diploma Programme Visual Arts and Community, Action and Service areas. The native Filipino taught in the Fine Arts Department at the University of the Philippines and IBDP Visual Arts for 12 years at the Cebu International School before coming to OIS-KG. Esperanza likes to watch movies, spending time with friends, and of course, drawing and painting.



The position of Inclusion Specialist (Teacher of students with Special Needs) and English Support is new this year to OIS-KG. John Van Plantinga will be developing this program. The California native, now residing in Maui, Hawaii, graduated from California State University at Chico with a BA in Organizational Communication and Information Studies. Before going into education, Mr. Van Plantinga had a career in managing and training hospitality teams to serve foreign clientele in places like Guam, Saipan, Borneo, and Thailand. He also taught English in Seoul, Korea and starred in the national television program, Survival English. John then left a budding acting career to get a Masters of Special Education from the University of Hawaii in Manoa. John was an Inclusion Specialist in schools in Hawaii before coming to OIS.



Marcella Cooper is our new Middle School Humanities and English Teacher. She is from Toronto, Canada and graduated from York University with degrees in English, Psychology, and Education. Marcella has taught in Canada and Thailand. She is here with her husband Mike, and she is an avid runner, hiker, and practices yoga for relaxation.



Andrew Dieterly is teaching Visual Arts in the Middle School, High School and Kindergarten programs this year. He

is from Pennsylvania, USA and graduated with a Bachelor's of Fine Arts from Kutztown University (PA) and has a Certificate in Teaching English To Speakers of Other Languages from the Cambridge English Language Assessment. He has been teaching English at the AEON Language Institute in Namba before coming to OIS. Andrew enjoys drawing, digital painting, reading, and hiking.



Carolina Sandoval Durazo, or Mrs. Dupont is the new Design and Visual Arts teacher in the MS/HS. She is a native of Mexico and graduated from the University of Hertfordshire (UK) with a Bachelor's Degree in Graphic Design. She has taught in Germany, China, India and Mexico before coming to OIS. She enjoys hiking, reading, traveling, and spending time with her husband, Briag, an OIS science teacher.



David Emerson Myers is teaching in our MS/HS Visual Arts Department. The Canadian native recently completed a Masters of Fine Arts from the Maryland Institute of College of Art in Baltimore, Maryland, USA. This multi-talented educator has degrees in Political Science from Lakehead University in Thunder Bay, Ontario, an HBA in Education, also from Lakehead University, a Masters of Art Education from Boston University, and a Carpentry Apprentice Certification from Confederation College in Ontario. Mr. Myers has taught fine arts at the university and high school level in Canada, the USA, and Japan. He is also an active artist, with exhibitions showing in the USA. He lives in the southern part of Osaka with his wife Wakana and two year old daughter Lin.



Thomas Hinsken joined us earlier this month as our new German Language Teacher. He is teaching a group of 10 students from both SIS and OIS. The Munich native has a Master's Degree in British Literature with a minor in the teaching of German as a Foreign Language from the University of Regensburg. During his masters studies, he taught classes at the university. He came to Japan five years ago and is working at the Goethe Institute in Osaka and he teaches German Communication classes at Ritsumeikan University. "I really enjoy working with the students of SOIS. The faculty has been very kind and helpful in my orientation. I love the Kita Senri suburb and it is one of the nicest in the Osaka Metropolitan area. I look forward to getting to know the school better as I continue the year."



Two Schools Together 関西学院創立125周年

田淵 結

関西学院千里国際キャンパス統轄、関西学院宗教総主事

去る9月28日曜日、関西学院は創立125周年の記念の日を迎えました。明治22年(1889年)のこの日、関西学院は兵庫県知事より「学校」設立の認可を与えられたということに記念して、この日がずっと学院創立記念日として守られてきています。そのときの教師はアメリカ人宣教師(具体的に言うと南メソジスト監督教会)ランバスをはじめとする5名、生徒は19名という小さなものでした。その関西学院があった場所は今の神戸市立王子動物園のところ、今でもその一角に関西学院のチャペル(礼拝堂)として立てられた建物が神戸市文学館として残っています。ただし創立当初「学校」と言っても小さな塾のようなもの、当時の文部省が認定する学校としてはまだまだ「未熟」な組織でした。しかし、そこでとても興味深いことがありました。



と言うのも文部省認定の学校では、何を、誰が、どう教えるかということがしっかりと決められていました。だからこそその学校を卒業するとさらに上級学校への進学が認められたのです。当時の関西学院はAcademy、日本的に言うと旧制の中学校(今で言う高等学校低学年まで)でしたから、その旧制中学を卒業すると高等学校、大学へという進学ができるはずなのですが、まだ学校としては十分ではなくそれが認められてはいなかったのです。ところが、興味深いことに、当時の関西学院を卒業した人たちは日本の学校には進学できなかったのですが、そのままアメリカの、たとえばテネシー州ナッシュビルのヴァンダビルト大学などに進学しているのです。なぜ日本ではダメなのにアメリカの大学に進学ができたのでしょうか。そこが「学校」というものの考え方の違いなのです。つまり日本の文部省は、日本の社会に有益な人材を教育するための教育機関として学校を整備していきました。だからたとえば最初大学は国立しか認められませんでしたし、今でも国公立の学校が日本の教育の「主流」と思われています。ところが関西学院など、明治期に宣教師たちによって立てられた学校(関西学院をはじめ、明治学院、立教学院、同志社、青山学院など)は、どちらかという和世界という、より大きな舞台で活躍できる人たちの育てたいというビジョンで発展し、宣教師たちが所属しているミッションボード(派遣母体)の推薦でアメリカの学校などへの入学が可能だったのです。

関西学院の校歌にちなむ、今では考えられないようなエピソードがあります。SOISには学校の歌というものがないのですが、日本の多くの学校にはそれがあります。そして関西学院ができて10年ぐらいたった1889年に、自分たちの学校の歌がほしいという機運がたかまり、そこで“Old Kwansei”という曲が決まりました。まだ創立して10年目の学校で“Old”というのも不思議ですし、歌詞はすべて英語でした。もっと驚かされるのはその歌は、もともとアメリカプリンストン大学のカレッジソング“Old Nassau”の替え歌だったのです。今のように知的所有権などが明確になっていればとても許されなかったことでしょう。でも、日本の神戸という町の小さな学校の生徒たちが、プリンストン大学の学歌を自分たちの歌にして歌っている、その生徒たちはそうやって世界とつながっていたのでし



The Clock Tower, symbol of Kwansai Gakuin University

関西学院の創立にあたって、この学校は「キリスト教の主義」(principles of Christianity)によって日本の青年を教育することをその目的としました。以来関西学院は建学の理念としてキリスト教主義を掲げてきました(第二次大戦中はそれははっきりと言うことは許されなかったのですが)。キリスト教主義というのは、特定のキリスト教の信仰を求めるというのではなく、キリスト教的な考え方、価値観、などをしっかりと理解するということです。それはキリスト教的な考え方が世界の三分の一以上の人たちの生活を支え、聖書的な一神教的価値観となればイスラム教を含めて世界の半数以上の人たちがそれによって生きているという現実に応えようとするものでした。関西学院が125年の歴史を通じて、その最初から持ち続けてきた視点、それは世界の人々と私たちがどう生きるべきか、ということなのです。関西学院で学ぶこと、それは初代の院長となった宣教師ランバスが「世界市民」と呼ばれる、その生き方に示される姿勢を自分たちのものとするということなのです。そのことも踏まえて、ぜひ21世紀の関西学院が改めて宣言した、関西学院ミッションステートメントを読み返していただきたいと思います:

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育てることを使命とします。

Old Kwansei

Tune every heart and every voice,
Throw every care away,
Let all with one accord rejoice,
In praise of old Kwansei!
In praise of Kwansei Gakuin,
In praise of Old Kwansei;
Her sons will give, while they shall live,
Banzai banzai, Kwansei!

SIS Summer Camp

里山家族・フィールドレンジャー



田中理紗子
SIS12年

人が輝くために必要なものは何でしょう？きっとたくさんあると思います。頑張る姿、向上心、努力、など挙げればキリがありません。今年の里山家族のテーマはまさに「輝」でした。私たちフィールドレンジャーは7年生の輝く姿が見られることを目標に、約1ヶ月間の過密スケジュールをこなしました。

フィールドレンジャーとは、7年生が参加する2泊3日のキャンプ、里山家族の企画・運営を高校生達が担うプログラムです。私は総合責任者、「村長」を務めました。自分たちで作るこのキャンプはたくさんのミーティングを重ねなければなりません。テストや宿題が積み重なり、大変な時期も多いですが、準備期間はあっという間に終わってしまいました。

そして、いよいよキャンプ当日の朝。7年生を迎える前にフィールドレンジャー全員で円陣を組んだとき、私は今までに経験したことのないほど心が躍りました。このメンバーで素晴らしい里山家族を作ることができる、そう強く確信した瞬間でした。

7年生が到着してからは、フィールドレンジャーの顔つきが変わり、より一層たくましくなったように思いました。7年生と一番近くで関わり、ご飯やお風呂のお世話をするペアレンツは、時には優しさで、時には愛情深い厳しさで7年生を包んでいました。キャンプ中のプログラムは、準備から進行までを担うプログラマーのおかげで、順調に進み、みんなで楽しむことができました。困ったことがあればすぐに助けてくれるヒーローは、火をつける手伝いをしたり、重たい荷物を運んだり大活躍でした。司令塔のメインディレクターは、お互いのコミュニケーションを大切にし、全体が円滑に進むよう努めました。プレキャンも含めた4日間、大きなトラブルは少なく、無事にキャンプを成功させることができました。

ミーティングの最初の方は、私は自分が村長という役割を果たしている自信が全くありませんでした。それでも、だんだん自信がみなぎり、務めきることができたのは、こんな私についてきてくれた他のフィールドレンジャー31人のおかげです。人が輝くために必要なもの、それがいつか私たちレンジャーの合言葉になっていました。「輝きは笑顔から生まれる。」今年の夏、たくさんの輝く笑顔を見ることができたことを嬉しく思うと同時に、心から誇りに思います。



7年生の感想 ・普段はできない体験ができた。・リーダーの高校生と仲良くなれた。・虫が沢山いたがそれも良い経験だった。・へっつい(かまど)で炊いたご飯が美味しかった。

7年生はこのキャンプによって仲間との絆を深めることができたように思います。その仲間が1つの大きな「家族」として支え合い、思いを分かち合ったひと夏の経験は、これからのSIS生活の糧となると感じました。

(Student Reporter A)

海洋キャンプ・マリンリーダー

相良宗孝
体育科

海洋&マリンリーダーキャンプは、今年も徳島県阿南市にあるYMCA阿南海洋センターで、71名の参加者と5名の引率教員(山城、佐尾、相良、山本、三ツ橋先生)で4日間の日程にて行われました。今年もカヤックやヨットなど日中のさまざまな海のプログラムに加え、即興劇や各種レクリエーションなどの夜のプログラムまで、盛りだくさんで行われました。下記に夜のプログラムやキャンプ全体を取り仕切ってくれた2名のリーダーたちのコメントを載せましたのでどうぞご覧ください。

全体リーダー:谷村凱也

今回、僕は総リーダーとして海洋キャンプに参加しました。自ら望んでリーダーになったものの、最初は不安でした。なぜなら過去2回なんとなくキャンプに参加してきただけだったし、大人数をまとめた経験も無かったからです。初日は僕たちが話をする時もざわざわしていたり前を向いてなかったりと大変でしたが、2日目辺りから各班のリーダーが積極的に注意してくれたおかげで皆が話を聞いてくれるようになりました。その時に、色んな人に支えられてキャンプは成り立っているのだなと感じました。例えば、毎晩のレクリエーションや部屋の管理。キャンプまでにミーティングを重ね、とても楽しいレクリエーションを作り上げてくれました。各部屋長も自分の部屋の管理に努めてくれました。最終日、「キャンプ楽しかった」と言ってもらった時は本当に嬉しかったです。リーダーの皆、副リーダーの直田さん、引率の先生、YMCAの職員の方々の支えや努力で最高のキャンプを作り上げる事が出来ました。そんなキャンプの総リーダーを務められた事に嬉しく思います。そして、こんな頼りないリーダーについてきてくれた事に感謝したいです。本当にありがとう！！



全体副リーダー:直田彩加

海洋キャンプは海が大好きな私たちにとって、最高の夏休みのスタートです。真夏の日光が照りつける学期末が近づくと、私たちリーダーは試験やレポートで寝不足の日々と戦いながらも、キャンプの細々とした準備も行いました。私は今回、マリンリーダーの総副リーダーとして海洋キャンプに参加しました。初めてのまとめ役で戸惑ったこともありましたが、総リーダーや先生方、YMCAのスタッフの方々、そして協力的な参加者全員のお陰で、無事に責任を果たせたことを嬉しく思っています。客観的に見ても、SISの生徒は、その行動力、判断力、団結力、笑い力などどれをとってみても、自信過剰なほど実力を備えていると感じました。これはSISの”恐るべき”教育が生んだ、自律の精神の現れであると思えます。最高学年となり、もう来年は参加できないと思うと、一抹の寂しさもありますが、日焼けした肌と共にこの最高の思い出は、私の心の中に焼き付いています。良い経験をもらえたこのキャンプを支えて下さった全ての人に感謝したいです。

森の達人・フォレストマイスター

田中 守

SIS理科

『やるならとことんやるのが、このキャンプのこだわりだ。とことん楽しめ！森を極めろ！』

場所は三田市の関学千刈キャンプ場。日程は7月1日(火)～3日(木)指導はフォレストマイスタープログラムの高校生が担当します。近くて時間も交通費のかからない「三田市」にある、利用料金格安の「千刈キャンプ」を使うことで、食べ物とプログラムにたっぷりお金と時間をかけることができました。代表で8年生の中山ゆかさんの感想を紹介します。

私は、何と言っても想像以上のご飯の美味しさに驚きました。特に、自分で作った中で美味だったのは、ダッチオープンで作ったローストチキンとスペアリブステーキでした。食べてびっくり、本物のローストチキンの味がするではないか！皮はバリバリで野菜も甘くてホクホクして、調味料は塩胡椒だけなのに肉の旨味がふあ～ってなって。あと、肉汁もすごかったです。ジュシーでめっちゃおいしかったです。スペアリブも最高。私たちの班は美味しくすることに徹底的にこだわった結果パークをニンニクと袋に入れ、味を染み込ませるためにハンマーで叩くことにしました。これで、ニンニクが肉の隙間に入り込み、味が中まで染み込みました。もちろんパンもおいしかったです。パンは、ありとあいが作ってくれました。二人ともめっちゃこねるのうまくて、焼き加減も完璧でし

た。だから、味もすばらしかったです。炭のいい香りがして中はふわふわしてお肉と絶妙なバランスでした。自分が作ったご飯でこんなに美味しいって感じたのは初めてでした。うちの班がよく食べる子が多かったからかもしれませんが、お肉の量は1.5倍くらいにして欲しいです。私たち食べ盛りです。森の遊びも楽しい。これしか言いようがありません。木登りを初体験して(実は、私高所恐怖症です)みて、ジップラインをして、森に住んでこれで移動とか狩りとかしてみたいなと思いました。もっとジップラインは、長いのができたら作りたかったです。スリル満点でユニバの絶叫マシンに乗っているいじょうにドキドキしました。森達は、里山とは、違って小さなキャンプでした。人数も少なかったです。だけど、その分上の学年の子ともしっかり仲良くなれたり、お互いのことが知れました。みんな優しく面白くてかっこ良くてめっちゃあこがれました。私も10年になったら是非フォレストマイスターをやりたいです。めっちゃいい思い出になりました。

フォレストマイスタープログラム(達人リーダー)

『歓声を上げる子供達を見守る温かい目差し。街の乾いた生活の中で、希薄となった人と人とのつながりを、自然の中でなら再発見できるだろう。君の中に眠る「リーダーシップ」を目覚めさせる最適なフィールドがそこにある。』

場所は三田市の関学千刈キャンプ場。日程は6月30日(月)～3日(木)中学生の「森の達人キャンプ」を指導するリーダーシップ養成プログラムです。代表して12年の中島茜音さんの報告/感想を紹介します。

受験を控えた今年、この先SISでリーダーシップについて考えたりする機会がもうないかもしれない、それならば、高校生活最後のキャンプをリーダーシップの集大成に位置付けようと考えこのキャンプを選んだのです。周りのメンバーに協力してもらい、最終的にはリーダーらしくなれたかなと思います。

1日目:朝10時過ぎには中学生が来るため、朝は慌ただしく最終チェックをし、中学生が来てからは、グループごとに生活拠点となるタープを建て、昼食後は宿泊用のテントをたてました。この日の夕食はローストチキンで、ダッチオープンを使い調理しました。夕食後は肝試しをしました。慣れない作業には時間がかかりましたが、みんなすぐに仲良くなれていました。

2日目:中学生は朝早くから起きて散歩をするほど元気で、高校生全員驚きました。朝食は火を起しホットドッグを作りました。昼間はターザンロープ・ジップライン・木登りなどの森遊びをしました。昼食前にそれぞれの遊び道具を作り、昼食後に遊びました。夕食はスペアリブステーキでした。その後キャンプファイヤーと花火をしました。

3日目:最終日なのにこの日は朝からあいにく雨でした。朝食はベーコンや玉子を焼いたブリティッシュスタイルでした。その後、昼までにテントやタープを片付け、昼食後はグループごとに模造紙にキャンプのまとめをし、発表会をしました。あっという間に閉所式を迎え、寂しさもありましたが、みんなの満足そうな笑顔が見られてよかったです。

今回のキャンプではメンバー全員が本当に仲良くなれて、キャンプ後の感想でも「大変だった」「しんどかった」などのネガティブな感想は全くなく、「楽しかった」「また参加したい」など前向きな意見が多くあったので、今年の森の達人キャンプは大成功！だったと思います。終わってみるとあっという間でしたが、キャンプの難しさや楽しさ、そして何よりリーダーシップの大切さについて改めて考えることも出来、充実した内容となりました。



チャレンジキャンプ

参加生徒一同
このキャンプ
で各自の人生
で何かしらの
キーポイントに
なることを確信
しました。

1日目のロッ
ククライミングで
は、3つのコース
がありまし



た。それは、自然の断崖絶壁でした。3つのコースの中から1つを選び、20分で登りきるものでした。それらは、想像していたもの以上に、簡単に登ることはできませんでした。しかし登りきったときには達成感を感じ、挑戦する楽しさを感じることができました。しかしながら、二日目からの山登りの過酷さを予感させるものでした。

2日目からは、約20kgの重い荷物を背負い、険しい山を登り始めました。地図とコンパスだけを渡されて、道を探索して前に進んでいきました。険しい山道ばかり、登るのも困難で、山道が果てしなく続き自分たちの体力も限界になっていきました。目的地に到達するために何回も休憩をしたい気持ちを抑え、必死に歩きました。キャンプ場は雪上で、テントを張るのも困難なほどでした。いつもはすぐに手に入る水でさえ、遠くまで汲みに行かなければならず、水を飲む量が制限される苦しみも感じました。その分普段、私たちが使っている水のありがたみも身にしみてわかりました。

毎晩は、当日の振り返りをしました。そこでは、自分たちの思っていること、当日の反省や改善点、ここが良かったなどを1時間かけて素直に話し合いました。それは、翌日のチームワーク力向上に繋がるものでした。

3日目は、朝早くから行動を開始しました。山を登り始めるころには、日も完全に昇って美しく、それも私たちのやる気の一つとなりました。登山3日目には辛さは変わらないどころか、余計に過酷さを増しました。

その辛さを、和らげてくれたものの一つが雲海の景色でした。それは、写真で見るとは、まったく違いその土地にいる者にしか見ることのできない素晴らしい物でした。

登山最終日である4日目では、下山を始めました。体力的、精神的状況もいっばいいいっばいになっていたのも厳しいものでした。着いたときには、皆の気持ちは楽になり、全てから開放された気分でした。その後の温泉や食事は、登山の疲れを落としてくれました。

キャンプ最終日には最後の振り返りをしました。宿泊所周辺の森を各々歩き、自分と向き合う時間が設けられました。そこでは、「チャレンジ」とは何か、自分でチャレンジできたこと、できなかったことを自分自身で振り返りました。

ドルフィンスイムキャンプ

寺辻奏芽

SIS11年

今回のドルフィンキャンプでは、たくさんのことを学びました。などというありきたりな始まり方になってしまいますが、本当に今回のキャンプでは、自分たちが内容を楽しむだけでなく、「楽しむ」とい



うことの本質を学べたと思います。

私たちがイルカと一緒に泳いだり、串本で様々な事を体験した時に、何よりも思ったのは、「楽しませる」あるいは「楽しくする」という側の人々がいかに努力してくれているか、ということです。宿舎で私たちの世話をしてくださった方々、博物館の案内をしてくださった学芸員の方、イルカと泳ぐ際にヘルプを頂いたドルフィンベースの人など(全員はここには書ききれません!)、いろんな人が協力して私たちに「entertain」してくれているのをここまでしみじみと感じられたのは、このキャンプのとても良いところだと思いました。

また、夜のレクリエーションでは自分たちが企画をして、下級生たちにキャンプを楽しんでもらえるよう、肝試しの企画や体育館でのドッジボール、野島先生が考案したルールサッカーなど、楽しませる側の役割もしっかり果たすことができました。何をどうやったら皆が楽しいと思ってくれるのか、皆にとって公平な内容にできるか、など頭を使う場面や、皆が楽しんでいる分自分たちは我慢するといったところもありましたが、楽しませる側の良さもまた違って良いと実感できました。

こんな風に散々「楽しさ」について真面目に語った後で言うのもおかしいですが、ドルフィンキャンプでは童心に返ってエンジョイすることもできました。初めて食べるクジラ丼ではしゃいだり、イルカショーを見て「人間よりジャンプ力あるやん!」とふと叫んだり、イルカを触ってなすびみたいだなーと思ったり、初めて体験する数々のことを純粋に楽しみました。他のキャンプでは、皆一度はしたことがありそうなことをやっているけれど、ドルフィンキャンプは初めての連続で、驚きっぱなしの4日間となりました。

キャンプを楽しくするために尽力してくれた合志先生、時には厳しく、また一緒に企画を考えて下さった野島先生、ありがとうございました。あと、リーダーとして何かと皆をまとめてくれた権、ありがとう!

食農キャンプ

前田杏花

SIS8年

私がこの食農キャンプに参加しようと思ったのは、ほかのキャンプに比べ虫が少なそうだな、と思ったからです。初めはそんな軽い気持ちでしたが、このキャンプが終わった今は「食農キャンプに参加して、本当によかった」と心から思っています。

1日目、私たちはファーム散策の時間を使い、それぞれ思い思いの動物に会いに行きました。私が真っ先に向かったのはミニブタハウス。「ミニ」と聞いていたので、子猫くらいの大きさを勝手に



想像していましたが、思いのほか大きくてびっくりしました。散策の後にはみんなでバター作り。絞らたてのジャージー牛乳をみんなでバーテンダーのようにフリフリ。私はスタッフの方に振り方がうまいとほめられました。照れくさかったです。振っていると牛乳の脂肪の部分が少し固まってきました。それがバターです。出来上がった後はパンにつけて味見。スーパーなどで売っているバターと全然変わりありませんでした。おいしかったです。

牧場では牛の乳絞りをしました。何人かは前にやったことがあると言っていました。ほとんどの人が初挑戦でした。ベトベトしているのかと思っていましたが、実際はそうではなくて、簡単にできました。もう一度やりたいです。

ひそかに楽しみにしていたコテージはすごくきれいででした。フロントでそれぞれの班が消費した電力がランキングで表示されるため、みんな、必死で節電。エコをしながら、楽しみました。

2日目は7時からもう仕事。みんな、眠たい目をこすりながら、しいたけを収穫しました。そんな仕事の後は待ちに待った朝食。バイキングでした。すべてのものがおいしくて、中には3回ほどおかわりする人もいました。おいしい朝ごはんを楽しんでいると、スタッフの方が収穫したばかりのしいたけをいれて持ってきてくれました。おいしすぎて、余ったしいたけは、じゃんけん争奪戦をし、食べました。その後はバスで30分ほど移動して農場へ。女子は野菜収穫、男子は薪割りを行いました。次々と現れるミズバネや蜂。「きゃー」と逃げ回る女子もいれば、「はいっ！」と手掴みする勇敢な女子もいましたが、何とか収穫することができました。男子は薪を割ったり、チェーンソーで切ったりかっこよかったです(まあ、惚れはしませんが…)。

さあ、集めた野菜と男子が準備した釜でピザ作り。いくつかのグループに分かれて行きました。生地をのぼす作業が1番難しかったです。私のグループは全然真ん丸な生地ができませんでしたが、職人がやったのではないかと疑うほどの丸い生地を作り上げたグループもありました。でも、味は最高でした！！

最終日は、前日より6時30分から仕事開始。目が半分しか開いていないような人もたくさんいましたが、馬や牛、ヤギに会うと一変。みんな元気に働きました。そう、朝の仕事は餌やりと小屋の掃除。掃除はしたくない、という人がほとんどでしたが、一生懸命掃除しました。

その後はソーセージとパン作り。それぞれ、やりたい方をしました。私はソーセージをチョイス。ソーセージは羊の腸に詰めていると知って、びっくりしました。てっきり、豚の腸だと思っていたからです。詰める作業は難しく、途中、腸が破れたりもしました。でも、

何とか完成させることができました。そのときの達成感は忘れられません。

この3日間、私たち21名はさまざまなことを学びました。バターやソーセージの作り方などはもちろんですが、それ以上に大切なものを学びました。命の大切さと、自然界の神秘です。こんな言葉を使うと大げさかもしれませんが、この2つはとても大切なものです。私たちは、自然のこと、命のことを知ることで世の中を見る目が変わります。「ああ、このソーセージは、豚はもちろん、羊も使ってつくられているんだ」「この野菜は誰かの手によって大切に作られたものなんだ」という風に、些細なことに気づけます。これだけでも、この3日間は意味のあるものだったと思います。

食農キャンプは最高に楽しいです。虫が嫌いな私でも、思う存分楽しめました。参加した全員が必ず楽しめるこのキャンプ、どうぞ、お試しあれ。

心の旅

乾真裕子

S1511年

高野山は大阪よりもずっと涼しかった。夏真っ只中だというのに、高野山は気温も丁度よく、心地の良い場所だった。そして何よりも、ご飯がとても美味しいのだ。

6月30日、私たちは高野山へ到着した。恵光院という宿坊へ向かう。宿坊に着いてから、まずは数珠作りをした。数珠の玉ひとつひとつを、丁寧に磨いていく。「自分の過去、現在、未来を磨くように」と教わり、私たちはより一生懸命磨いた。数珠の玉からは、木のいい香りがした。その日の夜は、宿坊にいるお坊さんたちと親睦を深めるため、みなで百人一首と坊主めくりをした。本物のお坊さんと坊主めくりをする体験は、後にも先にもこれきりだろう。

二日目。この日は、初めて護摩祈祷を見た。目の前で燃え盛る炎と、聞こえてくるお経。五感を通して体験することができた。そして、夜は奥の院ナイトツアー。明智光秀や織田信長などの供養塔が並ぶ奥の院。夜の冷たい空気を感じながら、暗闇の中をずんずん歩いて行った。しかし、私はなぜか怖くなかった。むしろ、夜の奥の院はとてとても綺麗だと思った。それは、道を挟んで両脇に並んだ灯籠の光がとても優しく感じたからかもしれない。

三日目は、自由プログラムだった。私は友達と3人でレンタサイクルをして、高野山全域を回った。他に女人道をハイキングしたグループもあった。私がおすすめる高野山の楽しみ方は、食べ歩きである。くるみ餅がとても美味しかった。

悲しい最終日。いつも通り、朝から阿字観(座禅に似たもの)をし、護摩祈祷、そして作務。この一連の流れが当たり前ようになってきたが、最終日なのである。この日は、再び自由時間があつた。私は友達と、おいしいランチを食べに行つた。そして恵光院の方々に感謝と別れを告げ、私たちは高野山を出た。

心の旅は、学校のキャンプとは思えないほどリラックスできるキャンプだった。日常から少し離れて、ゆっくりと充実した時間を過ごすことができた。



千里ヒストリア



村田啓輔
SIS12年

私たちが参加した「千里ヒストリア」のキャンプは0泊3日(つまり日帰り×3)で行き先は兵庫、京都(そして最終日は学校)という「馴染みがありすぎる」...と言っても過言ではないくらいの超近場へと赴きました。

さらに集合した人数は生徒7人、中村先生、そして増尾先生の合計9人といったこれもまた随分と少人数の旅になりました。

この旅の目玉はなんといってもその自由度の高さです。まず私たちはグループに分かれ、(今年は男女別)各々のグループ毎に兵庫、京都の二日間の予定を立て、そのスケジュールを元に当日の行動を行いました。グループ別の旅では付き添いの教師も居ないので、時間の管理や有事の予定変更、昼ご飯を食べる場所などは全てグループのメンバーの裁量に一任されており、現地を歩いてみて少し寄り道したりするのもこのキャンプの大きな醍醐味です。

さて、このキャンプの主たる目的は「その年の大河ドラマの主人公の所縁の地を巡り、彼らの人生をより深く知り、ひいては大河ドラマをより良く楽しむこと」です。なので当然メインは修学することとなります。

今年の大河ドラマの主人公は「黒田官兵衛(孝高・如水)」です。簡単に説明すると、羽柴秀吉の軍師として彼の天下泰平に携わった功労者の一人です。彼が城代を務めた姫路城(別名白鷺城)は美しい外見と連立式天守閣を持ち、ユネスコ世界文化遺産にも登録されています。この姫路城を始めとして、兵庫や京都には官兵衛所縁の地が多数存在しています。

最終日は学校に集合し、各個人で調べたテーマを元にプレゼンテーションを行います。テーマも自由度高めで、現地で調べられるようなものであり、常識的な範囲内で相応しいものであれば何を調べても構いません。

一見歴史色の濃いキャンプに見えますが、歴史に詳しくなくても、そしてあまり好きでなくても楽しめるキャンプになっています。私はこのキャンプが出来てから4年間ずっとこのキャンプに通っていて、もう最終学年になってしまいましたが、もしチャンスがあるのならば是非来年も参加したいと思っています。

農家ホームステイ

井汲友梨亜、武田七海
SIS8年

私たち8-9年生30人は農家ホームステイに参加しました。



1日目、SOISに全員集まって出発。バスで約3時間かけて、お世話になる農家の方々が住んでいる日高川町に行きました。交流センターで長めの昼休みのあと、早速農家の方と合流。私たち二人と谷さんは友達と別れ、兼業農家の柏木さんのお宅に。荷物を置き自己紹介からスタート。このとき出してもらった梅ジュースがとてもおいしくて、その後に地元で取れた梅を使った梅シロップを作りました。次は畑へ。土を掘り起こすとたくさんのジャガイモとともにもいろんな虫が出てきて、びっくりしました。次にそれを使って夕食作り。ジャガイモ尽くしのメニューをおいしくいただきました。その後、少し離れた場所にある田んぼまでドライブ。ついでに、9年の3人が泊まっているスナックにお邪魔して、カラオケをしました。その帰りにシカウォッチングをしましたが、何も見られませんでした。

2日目、7時起床。朝食を食べ、その残りかすを使った有機肥料を作りました。ぼかしという、肥料を混ぜて、一週間かけ発行させます。その後うちわ作り。続けてアクリルたわし作り。でも、難しく途中で断念しました。その後近くにある山へ森林浴をしに。そこでスイカを食べました。森のきれいな空気を吸いながら食べたスイカはとても美味しかったです。昼食にジャガイモを使ったカレーを食べた後、休憩がてらホームカラオケをしましたが、歌って疲れてしまい、昼寝。二時間ほどゴロゴロしました。寝て元気が出たら和歌山産のみかんを使ったオレンジジュースで二色ゼリーを作りました。それでおなかを満たした後、川へうなぎの筒を仕掛けに行きました。川には魚や蛙がいて、私たちは蛙とりに夢中になりました。家に帰って夕食を食べた後、就寝。疲れていたもので、すぐに眠れました。

3日目も7時起床。ワールドカップを見てから、朝食を食べました。9時ぐらいに川へ行きうなぎの筒をチェック。手長えびが一匹かかっていたのですが、逃げてしまいました。気を取り直して、次はアマゴのつかみ取りと釣りをし、合計14匹のアマゴをゲット！その後、係の方が片付けてくださってる間、近くにある滝へ！緑に囲まれた綺麗な滝でした。家に帰り、お昼を食べ少し休憩をとったら、次は農家ホームステイ全員でのBBQへ！交流センターの近くにあるドームでみんなが持ってきた野菜、取って来た竹をを使いバーベキューと流しそうめんを食べました。全ての食べ物に農家の方々の気持ちを感じました。みんなお腹いっぱい食べ、暗くなったら河原へ花火をしました。名残を惜しみながら家に帰り、最後の夜を過ごしました。

いっぱい食べていっぱい眠ってちょっぴり働いていっぱい遊んだ三日間でした。

SIS「ヤング天城会議」報告

堀本季歩

SIS10年

私は今年の夏休みに、本校の代表としてヤング天城会議に参加した。私は兵庫県民代表と同時に、本校代表ということから現地静岡に着くまで緊張していた。しかし、実際に集まってからすぐに打ち解ける事は難しかったが、数分経てば定番の出身県の質問から話題を広げていき徐々に仲を深める事ができた。このプログラムには、九州から東北までの多くの県から計20名が参加した。この幅広い県から参加しているということから、2つの良き点があった。1つ目はテレビや新聞でしか知らなかったニュースの正確な現地情報を知ることができ、ニュースを身近に感じられたということである。例えば、原子力発電所の事を、福島県出身の生徒に聞いてみたところ、その人の家の周りに被害は無いのだが少し車で行くと被害を受けている所もあるという。このように、自分の友達があの東日本大震災の影響を受けた場所の近くだと思えば、よりニュースを身近に感じられる。そして2つ目は、方言の違いについて深く知れたことである。私の友達は数名が標準語を話すものの、大半が関西弁を話す。しかし、このプログラムに参加した生徒の中で関西弁を話したのはたったの4人だった。多数の人は標準語を話しており、残りの人は福岡弁などの各県に存在する方言を話していた。今までの自分の環境とは大違いで、私はそれに刺激を受け、日本にはこんなにたくさんの方があるのかと、関西弁が一方言という視野を広げることが出来た。

そして、ヤング天城会議のメンバーの中には生徒の他に、IBMから来て下さったファシリテータもいらっしゃり、彼らからもたくさんのお話を学んだ。電話や直接会ったりなどをコーディネートし、国と国をつなげたりするのもIBMの仕事の1つである。このファシリテータの皆さんは国際事業においても今までの人生においても多くの事を経験しているので、これらについて自分たちが聞きたいことを実際に聞けることは、とてもためになった。プログラム中、自分たちのグループごとにプレゼンテーションを作成したのだが、どのような話し方が聞き手を引き込むことができるのかなどを学んだ。ジェスチャーだけでなく、声のボリューム、話すスピードや表情を変化させてゆくことで、より聞き手の興味をひくことができることなどを教わった。そのIBMのファシリテータの中に本校出身の方がいたので、自分の学校からこのような魅力的な人が出て、世界で活躍しているのかと誇りに思った。

ここからは、このヤング天城のプログラムから学んだことを紹介する。主に各チームで複数のプレゼンテーション作成を行い、その課題の一つに「日本が最も解決を優先すべき問題は何か。」というものが1つあった。ミーティングは少人数で行ったにも関わらず、どの問題も他の多岐の問題と結びついているため、グループで出したアイデアの中から1つに決める事は困難だった。そんな中で、より話し合いを効率的に進める方法として役割分担を決めることを教わった。役割はタイムキーパー、司会者、板書の3つである。今回は一時間でのご作成だったので、みんなが話し合いに集中し、時間の事を忘れてしまわないようにする役割はとても重要なものとなった。そして、司会者。私達のグループでは、意見の主張が苦手な人をあえて司会者におき、メンバー全員が参加出来るように工夫した。そして、私が一番驚いたのは板書係が必要という事だ。その理由は実践してみても分かったのだが、ミーティ

ヤング天城会議: 日本IBMにより企画された、将来グローバルに活躍したいと考える高校生へ成長のきっかけを提供するプログラム。

ングが行き詰った時にそれぞれが自分の書いたノートを見ているだけで、意見があっても言えないぐらい静寂な時があった。しかし、みんなで共通のものをみることで自分としても意見を言いやすかったし、周りからも意見が多く出てくるようになった。また話し合いを行き詰らせない方法として、一番初めにミーティングで重要だと思うことをみんなでまとめておくことである。私のチームでは、行き詰ったら一旦戻る、分からない単語はしっかりと聞くなどが挙げられた。分からない単語を聞くのを恥づかしがってためらっていると、どんどん理解が困難になるので必要だと判断した。会議が行き詰った際、目の届くところに始めに決めたこれらを貼りだしておいたことで、何を今守っていないなどを話し合い、再びミーティングを始める事ができた。このように、プレゼンテーションの内容から経済を学ぶことができ、発表までのテクニックなども多く習得出来て、とてもためになった。しかし、これから私が行うミーティングで、自分がここで学んだことを全部生かすことが出来たときに、初めて「習得した」といえるので、今後はこの技術をどうやってみんなら使っていくかが私の新たな課題となる。また、私が驚かされたプログラムの1つに会話無しでのトランプゲームがある。各チームに全く違うルールが書かれた紙が配られ、1回目のゲームはそのグループのメンバーで行い、その後は勝者がほかのチームに混ざるといわれるのを繰り返したものだ。なので、スペードが一番強く、全ての3のカードが一番弱いと教えられている人もいれば、全く逆のルールをインプットしている人もいる。そしてミックスされた人たちが同じテーブルで、声を出さずにプレーをしなければならない。会話ができないし、プレーしている最中にはみんなが把握しているルールが別物であるという考えはあるはずもなく、ただ自分が正しいと思うルールを主張し続けたりしていた。後々、種明かしがされた時には自分の考える視野が本当に狭い事が分かった。学校の授業の中で、多文化理解を習った際、自分は多文化を受け入れられると思っていた。しかし、頭の中では理解していても実際は無意識のうちに自分が正しいという思い込みが多文化理解が出来ていないことを改めて実感させられた。

プログラムでは、プレゼンテーションや講義を受け、様々な体験スタイルで学び、最終日に行われたスカイプで実際に外国に住んでいる人と会話をした。本校では日本語とほぼ同じ割合で英語が聞こえてくるが、見知らぬ人と直接ではなくビデオ通話を英語で行ったのは、私にとってとても新鮮なものだった。その話し相手は、子供の頃はストリートチルドレンだったが英語教育の支援を受けて、国際通話で生計を立てている。従来は教育を受けても就職先が見つからないケースが多かったが、今はこの道の充実化が重要視されている。このプログラムにおいて私は、新しい授業スタイルから現地の事を知るという新しい体験ができた。

このように、実際に国と国をつなぎ、ファシリテータに見守られながら新しい仲間と様々な事をこなしていくというのは、私にとってこの上ない経験だった。今回のプログラムが終了しても、私が得た技術や充実した時間はいつまでも残る。そして今の自分が学んだ事をこれからどう進展させ、活用していくかが更に自分を変えるのであり、将来を変えるのである。

「対話」と「教室の平和」

野島大輔

SIS社会科

大きな社会問題を、いかにして身近な日常生活と繋げて考えられるようになるか、これは平和のための学習を形作っていく上で、大きなテーマです。『一本のバナナから』は、地球大の経済格差の問題(南北問題)を、小学生にも解るように開発された学習プログラムで、今や広く知られるようになっていきます。また、米国で「平和教育」というと、まずは学校という身近なところから始められ、いじめや暴力のない「教室の平和」を作り上げるための学習がとても重視されています。

ゲリラ豪雨、メガ台風、…この夏から秋にかけての天候の「異変」によっても改めて気づかされる通り、先進国、特に日本社会のエネルギーの使用量は、とうに地球環境の限界を超えており、「宇宙船地球号」の安全な航海にとって大きな脅威となっています。また、地球上のそういった一部の地域では、エネルギーは人々の生活や安全の基礎を支えるためだけでなく、多くが「快樂」のために使われるようになっていきます。例えば、家庭で使われる電気の消費は、大半がエアコンと冷蔵庫によるもので、これは家族や個人の心がけによってかなり節制が可能です。両方とも、本来は基本的な食料を安全に保管し、熱中症を防ぐために使われるなら、有用な文明の利器なのでしょう。

ところが、企業や学校など、大勢で使われるエネルギーのことで、直接には自らの財布が痛まないという錯覚するためか、人々の間で節制の責任の所在が曖昧になりがちです。地球環境の問題が先進国の日常の生活に直結していることを直視せず、少数者のこともあまり考えに入れなければ、人々の「快樂」への衝動は、容易に増幅します。「生活」や「安全」の必要というレベルを超えて、一部の人の「快樂」のためのレベルの欲求までもが、堂々とまかり通るようになってしまふ訳です。多数者の「快樂」は、知らずの間に少数者の「忍耐」を強いるようになり、やがては全体の破綻を招き、多数者の「生活」や「安全」をも破壊していきます。

このような、社会の大きな不条理なメカニズムを、日常生活に結び付けて「多数者」にも「少数者」にも効果的に学んでもらう学習プログラムを考案するのは、なかなか至難の業です。うんうんと唸っていると、そこへちょうどSISのある生徒(海外帰国生)から、自主作成のレポートが舞い込みました。これはまさにSISでエネルギーの問題を日常の中で考える教材としても秀逸と思われましたので、以下にご紹介いたします。

“Let's Save the Energy”

日本に帰国してから毎日のように感じる場合があります。それはエネルギーの無駄使いです。

一つ目はコンビニです。あまり暑くない日に入っても、冷蔵庫に入ったような感覚です。コンビニは24時間開いているところがほとんどで、夏は冷房と照明、冬は暖房と照明が24時間365日使われています。現代ビジネスのサイトによると、コンビニの平均的な消費電力は1日で480kwh、これは小さめの住宅の一ヵ月分に当たります。正直私は、コンビニを24時間開けておかなくてもいいと思います。なぜなら夜中はほとんどの人が寝ている時間なので、3、4

人のお客様のためにわざわざ開ける必要がないと思うからです。夜中に何か食べたくなったらその日は我慢して、次の日の朝や夕方にコンビニに行き買って買うか、夜ご飯をお腹いっぱい食べればいいと私は強く思います。日本が便利になりすぎていて、日本人は我慢が出来なくなっていると、帰国して私は強く思いました。

二つ目は、SISで私が気づいたエネルギーの無駄使いについてです。

私が一番気になっているのは、クラスの窓が全部空いているのに冷房を一番強くかけている教室です。冷房をつけているのは部屋が暑いからだと思うのですが、窓を開けて暑い空気をクラスに入れ、涼しい空気を外に出しているのでは意味がないと思いました。これはすごくエネルギーの無駄使いだと思いました。私がさらにびっくりしたのは、このことに気がついた生徒たちが何もなかったことです。私が人生の半分を過ごした海外の国では、気づいたことや思ったことは口にして絶対に言うことが普通だったので、これには驚きを隠せませんでした。

一番多い夏のエネルギーの無駄使いは、クラスがもう十分涼しいのにずっと冷房をつけていることです。暑いのは分かりますが、クラスがキンキンに冷えるまでつける必要はないと思います。私はすごく暑い時にだけ冷房をつけたいと思うのですが、ある先生は、暑い時もそんなに暑くない時もいつもクラスに入ったら冷房を一番強くつけます。多分先生は、生徒のことを考えてつけてくださっているのですが、クラスが涼しくなっても消さないの、私はいつも「冷房を消してもらってもいいですか?」と言います。これを言わないと、50分間ずっと冷房が一番強いまです。

正直私は、35℃の日でも冷房はつけてほしくありません。なぜなら冷房のついているクラスに入ると、そのせいでお腹が必ず痛くなるからです。ですから私は今もクラスの中で上着を着ています。私はもうちょっと日本人は我慢した方がいいと思います。

SISに通うようになって、暑かったらすぐに冷房に手を出す習慣をやめた方がいいと思いました。暑いからすぐ冷房をつけるのではなく、その暑さをちょっと楽しむこともした方がいいと思いました。でも我慢はそんな簡単には出来ないと思うので、まずクラスがある程度の室温になったら、冷房を消すことから習慣づけるようにしたらどうかと思います。冷房は体に悪く、エネルギーも消費するからです。この無駄使いをやめる対策としては、各クラスに大きめの温度計を置いて、ある一定の気温を超えたら冷房をつけて、涼しくなったら冷房を消したらいい、と思いました。これをするによって、体の健康にもよいし、ほんの少しですがエネルギーも節約ができると思います。

以上の点から私が思ったのは、日本が便利になりすぎていて、我慢ができない人が増えていることです。夏の暑さは結構きついのは私も体験しているので分かりますが、SISみたいにクラスルームを冷蔵庫状態にする必要はないと思います。暑いから冷房、ではなく、少しは我慢した方が将来的にもエネルギーが節約できていいと思います。

こういうちょっとしたきっかけから、エネルギーの使われる量が減ると思いますし、使う量が減ったら原子力発電もあまり必要性がな

(次ページ★に続く)

SIS 中学校英語弁論大会大阪府大会優勝

SIS8年藤戸美妃さん

SIS 8年生の藤戸美妃さんが10月3日に大阪市北区にある読売大阪ビルで開催された高円宮(たかまどのみや)杯第66回全日本中学校英語弁論大会府大会で優勝しました！美妃さんは上位5名のうちの1人として12月11日に東京で行われる中央大会に大阪府代表として出場します。この大会は1949年から続く読売新聞社と日本学生協会主催のとても大きなもの。大阪府大会だけでも24校32人の生徒が参加しました。今回は優勝した美妃さんにお話を聞いてみました。

Q. 会場や出場者全体の雰囲気はどうでしたか？

A. 会場に入る前からビルの外でみんな先生と一緒に弁論の練習をしていてとても驚きました。会場に入ってもみんな固い感じで先生と猛特訓していました。自分だけ制服でなかったし、会場に入っても練習してなかったので入賞できるか不安でした。始まった後もみんな静かで休憩時間に入ったら即座にみんな会場から出て行ってスピーチの練習をしていました。

Q. どんなことについてスピーチしたか簡単に教えてください。

A. 環境問題について発表しました。今年の夏休み環境問題のワークショップに参加して、そこで感じたこと、学んだことを5分間の弁論にまとめました。

Q. 学校外でのスピーチは初めてでしたか？

A. 小学生のときにスピーチコンテストに出たことはありましたが、こんなに大きな大会は初めてでした。

Q. 大会全体を通して感想があれば教えてください。

A. 話している間は思ったより会場が小さくて緊張しませんでした。優勝するとは思っていなかったのですが、一位の名前が呼ばれたとき

はとても驚きました。表彰状もたくさんもらえたと、とても大きなトロフィーを二つもらえてとてもうれしかったです。始めてこのような大きな大会に出て、みんなのレベルの高さを感じました。

Q. 12月に行われる中央大会について意気込みを教えてください。

A. 中央大会はもっとレベルが高くなると思います。大阪府一位になったからには、日本一になりたいです。そのためにもっとひとりひとりにスピーチの内容が伝わるように頑張りたいと思います。

藤戸美妃さん府大会優勝おめでとうございます！中央大会でも頑張ってください！

(Student Reporter M)



ENGLISH

(★前ページの続き)

くなり、発電所の事故などにより被害を受ける人もいなくなると思いました。

日本はとても住みやすく便利な国なので、この生活を長く続けるためにも、改めてその素晴らしさに気づいて、誇りを持って大切に守っていければいいなと思います。

掲載は本人の同意を得ていますが、本人が特定される可能性のある箇所や誤字などは編集しました。なおAさんは、熱帯・亜熱帯など世界で特に暑い地域からの帰国生ではありませんので、念のため…。

そういえば、小生が開校直後に本誌に初めて書かせていただいた記事は、本校の異常に高い年間光熱費の問題に関するものでした。しかし残念ながら、状況はあまり根本的には変わっていません。例えば教室で、冷房のON/OFFについての話し合いの機会を作ると、Aさんのように凍えて辛そうな人がいても、だいたい社会全体を考えての話し合いではなく「即・多数決」になってしまい、多くの場合、多数者の「快樂」のために少数者が「我慢」という結論になります。このような流れになると、Aさんのような立場の人は、なかなか声を挙げにくいでしょう。

内外の平和学の重鎮の方々、今の東アジアのような「危機」の時代に最も大切なこととして、日常レベル・近隣レベルでの積極的な「対話」の推進を挙げています。

すぐに投票や多数決に邁進する、数合わせだけの形式的な民主主義に対する批判から、「ディープ・デモクラシー Deep Democracy」という、対立する者どうしが直接に深い話し合いを成し遂げていくための社会運動があります。先日大阪で開かれた、ドイツで経験を積んだ専門家の指導者によるワークショップに参加してみました。「集団的自衛権」の是非に関する、意見の異なる人どうしによる白熱した「対話」の7時間。これは主に成人の集いに用いられ、下手をすると喧嘩別れになるリスクももちろんあるので、中学や高校の学習や生活にそのまま持ち込むのがよいかどうかは、一概に言えないかもしれません(もとより、小生にまずそのようなファシリテーションの力があればいいのですが…)。

けれどもAさんが学んでいた海外の学校のように、誰もがまず言いたいことを言う、誰もがそれを聞く、という習慣を当たり前にしていく、というのが、最初は小さなことに見えても、大きな「対話」の出発点になることは間違いないと思います。

SISで、「対話」を通じて「教室の平和」が生み出され、そしてやがてそれが「大きな平和」に繋がっていくことを願っています。

SIS Australia Home Stay

宮崎真奈、中島楓恋、西村あいり、富口晴菜
SIS9年

オーストラリアホームステイの準備は昨年の冬から始まりました。人数の少なさから中止になることが心配されましたが、無事9年生18人で行くことが決まりました。春学期が始まるとMr. Averyの”Language and Culture”という週一回の授業や近畿ツーリストさんが準備してくださった放課後の特別授業が始まりました。オーストラリアについて様々な事を学び、少しずつ期待が高まってきました。さらに春学期も終盤になるとMr. Rayと現地の学校で行うカルチャープレゼンテーションの準備を始め、どうしたらより楽しく日本の文化を伝えられるか悩みました。ついに当日、関西国際空港に集まり、見送りに来てくれていた家族とお別れ。荷物の重さが制限ぎりぎり顔が蒼くなっている人もいました。そんなこんなでリラックスしてオーストラリアへの旅路を楽しんだのですが、バスに乗り、現地の学校が近づいてくるとだんだんみんな緊張してきたのか声が不安そうに…先にSandgate District State high schoolに到着しみんな少し緊張した面持ちでバスを降りて行きました。Narangba Valley State High Schoolについて

Narangba Valley State High Schoolには男女8人、そして水口先生が参加し、とても有意義な3週間を過ごしました。この学校の全校生徒は約2000人いて、とても広い学校でした。そして学校の1日は朝8時半から授業が始まり、1時間10分の授業が4回、その間に30分の休みが2回あり、2時35分には完全下校という学校生活でした。

初めて自分のホストファミリーと対面した時、これからこの家族と3週間を過ごすんだというワクワク感と緊張、少しの不安がありましたが、相手は笑顔で私たちを迎えてくれました。ホストファミリーに日本のお土産をあげると、「これは画期的ね！」や「これをオーストラリアに輸入して欲しいわ」などたくさん嬉しい言葉が聞け、とても嬉しかったです。日本の文化や食生活、オーストラリアとの違いを聞かれ、あまり慣れない環境でありながらも何とか英語を使って説明すると、それに合わせて話を盛り上げてくれたりして段々緊張や不安も無くなりました。

初めての登校日。私たちが一番緊張した1日だったと思います。周りとは馴染めず、また、あまり積極的に話せず、本当にこのままで大丈夫なのかな？と思いました。しかし水曜日にあったSports Carnivalで、皆ではしゃぎ、食べたり・飲んだり、リレーに出たりして、楽しみました。そして金曜日にはAustralian Zooに行き、有名なカンガルーやコアラ、そしてあまり見ることが出来ないタスマニアデビルやディンゴ、大きな鷲、色鮮やかな鳥たち、大きなワニのショーを見ることが出来ました。

2回目からは段々周りも慣れてきてくれて、1日が一瞬のように早く感じました。ここからは水口先生無しでの生活でしたがあまり気にすることなく、皆それぞれ友達も増え、自分からコミュニケーションをとることも多くなりました。中には、バディの友達とSNSで繋がったという人も多かったようです。さらにAustralian Footballを体験しました。Australian cookingではNarangbaの生徒と一緒にオー



ストリアの伝統料理、ラムントンやミートパイを作り、とてもおいしくいただきました。週末はそれぞれ充実した時間を過ごさせていただき、写真を見ると皆笑顔で、とてもオーストラリアを満喫していました。

最後の週になった3週目。段々皆もこの1週間を終えたら日本に帰るという気持ちが出てきて、1日を大切に過ごし、楽しい時間を共にしてくれたホストファミリー、友達と別れるまで無駄な時間を過ごさずに最後の週を楽しみました。別れの朝は午前3時起床ととても早く、まだ寝足りない人もいましたが、それよりも自分のホストファミリーと離れてしまうことがとても寂しく、まだここにいたいという気持ちが大きかったです。

Sandgate District State High Schoolについて

Sandgate District State High SchoolにはSISの生徒10人と彦坂先生が行きました。ホストファミリーは私たちを暖かく迎えてくれ、緊張してうまく喋れない私たちに気遣って、話題を作ってくれて盛り上げてくれて、緊張をほぐしてくれました。

そして、次の日は初めての登校日でした。学校に着いた瞬間、私たちだけが制服ではないというのもあってとても目立ち、みんなからの視線を感じました。しかしSandgateの生徒はみんな明るく、とてもフレンドリーで打ち解けやすい雰囲気を作ってくれました。校内を歩いていると全く話したことのない人も挨拶をしてくれてとても嬉しかったです。この学校は1つの授業時間が長くて、授業数がNarangbaと同じく1日に4つしかありませんでした。昼休みが2つあって、みんなとlunchを食べたり、スポーツをして遊んだりして、楽しい時間を過ごしました。授業は学年によってバラバラで、数学などは年上のバディの人は大変そうでしたが、私の場合は2歳下だったので、内容は簡単で授業に参加することができました。校内はとても広く、どの建物も2階建なのに、教室はたくさんありました。特にフィールドが大きかったです。大きな木がたくさん生え、大きな野生の鳥もたくさんいて、とても景色が良かったです。

金曜日にはNarangbaにいるSISの生徒と合流しAustralian Zooに行きました。sports dayはSOISと同じでカラーごとに分かれて競いました。競技は、当日にこれに参加したいと言いに行くと、すぐに

参加できてとても自由で驚きました。SISの生徒もいろいろな競技に参加することができ、楽しかったです。出店のような所で、かき氷やホットドッグなどが売られていたり、音楽が流れたらみんなでダンスをしたりしてフェスティバルのような感じでした。

2週間目からは先生なしの生活。不安でしたが、友達もでき始め、あと少ししかないオーストラリアでの生活を大切にしようと思えました。また、特別授業としてSouth Bankの観光へも行きました。美術館へ行った後、ショッピングをしました。とても楽しくて、時間が過ぎるのがあっという間でした。

Sandgate High Schoolでの生活も3週間目になると、帰るまでの日数を意識しながらの毎日になりました。やっと生活のリズムに慣れ、バディーやホストファミリー、学校の友達とも仲良くなれてきた頃でした。英語の能力も、手応えを感じてきて、生徒それぞれが新しい文法や単語、会話の雰囲気などをつかみ始めていたと思います。私はホストファミリーやバディーとの会話で、英語の相槌などをたくさん学べました。私は、オーストラリアで今まで習ってきた英語を初めてと言っていいほどしっかりと使いました。授業でも英語を使う機会は多いですが、今までの私の英語の位置づけは、勉強で使う暗号のようなものでした。しかしこの留学で英語も日本語と同じ、自分の思いを伝え、相手の気持ちを聞く言語だと気づかされました。

ホストファミリーやバディーには本当にお世話になりました。色々な場所や食べ物、オーストラリアにまつわるたくさんのお話など、たくさんオーストラリアの事を教えてくれました。三週間という長い間、本当の家族のように接してくれました。現地の人の生活は、私のホストファミリーでは、シャワーは三分で浴びる、ランチボックスは自分で作る、夜七時に寝るなど、今までの人生でしたことのない生活でした。最初は戸惑ったこともありましたが、毎日が新しい発見でいっぱいでした。

Sandgate District State high schoolでの最終日にはfarewell partyがありました。千里国際の生徒はそこで修了証をいただき、日本のソーラン節を披露して、最後に私は短いスピーチをしました。この三週間で体験したたくさんことや、ホストファミリーへの感謝を述べました。長かったようで短かった三週間を振り返ると少し泣いてしまいました。バディーも泣いていました。本当に良い人々と巡り会え、良い経験ができて、たくさんのことを学べたとおもいます。

そして、日本へ帰る日、朝四時半に家を出発しました。その日、大型の台風11号が大阪に向かっていました。そのことは先生に教えていただいていたので、存在は知っていましたが、携帯も何もないので情報が入ってこず、とても不安でした。私たちは少しの不安の中、ホストファミリーと別れました。ホストマザーは私に大きなハグをくれ、別れを惜しんでくれました。友達には泣いている子もいました。幸い、私達は台風の影響を一切受けずに日本へ帰ることができました。まず日本の空港に入ると、とてもむし暑い！と感じました。オーストラリアは冬だったので、その温度差に驚きました。

最後に

オーストラリアで学んだ英語をこれからも英語やアートの授業でもどんどん使って行きたいです。そして、オーストラリアで出会った人々や体験したことは一生忘れない宝物です。事前準備を手伝ってくださったMr. Avery、Mr. Ray、近畿ツーリストの皆さん、私たちに素晴らしい思い出をくれたNarangba、Sandgate各校の先生方や生徒、3週間も家族の中に迎え入れてくれたホストファミリー、18人のメンバーを現地でも見守ってくださった水口先生と彦坂先生、そしてこんなに素晴らしい経験をする機会をくれた両親に感謝の気持ちでいっぱいです。

SIS OIS幼稚園に点字を教えに行きました

青山比呂乃

図書館

10月中旬の水曜と火曜の6時間目にアンスケを調整して、点字クラブでOISKBに点字を教えに行きました。これは、OIS小学部が取り入れているPYPというプログラムに沿った活動で「5senses(五感)」を日本語の授業で体験学習するお手伝いです。

点字クラブは、1991年9月から続いている中高生のクラブで、毎週水曜の放課後に、MMラボで活動しています。普段は日本語の点字の書き方を一通り練習した後、点字絵本作りに取り組んでいます。この絵本は、目の見えないお母さんでも、目の見える自分の子供にお話を読み聞かせることができるようにと作られるようになったもので、普通の絵本に文章を透明のシールに点訳したものを貼り付けて作ります。最初は間違えて、部分的やり直しも多く、なかなか点字図書館の蔵書にもらえるような作品はできないのですが、楽しくがんばっています。

OIBKBへは、2007年から毎年OIS日本語科の先生の依頼を受けて訪問しています。今年は時間の都合がついた12年の佐々木里菜さん、高橋弥生さんと顧問の私とで行きました。

1回目の水曜は、佐々木・高橋・青山の3名で、日本語で点字の紹介をし、小学館から出

版されている点字雑誌を目隠ししてさわって絵をみるなどを5歳クラスKBの16名の生徒に体験してもらいました。最初はお互いに戸惑っていたのが、ちょっと慣れると今度は意図したのと違うことを生徒が始めたりと、ちょっと苦戦しましたが、みんな興味津々で、さわる迷路も面白かったようです。

2回目の台風明けの火曜は、佐々木、青山の2名で「自分で点字を打ってみよう」という指導。生徒17名がなんとか、自分の名前を書いてみることができました。

高校生にとって普段話す機会もない幼稚園の生徒に教えるのは、なかなか大変でしたが、つぎつぎに話しかけてきたり、とても楽しんでいた姿に、うれしくなりました。



SIS 卒業生、教育実習で奮闘

駆け抜けた3週間

上原千紗

SIS18期(2011年度)卒業生

まさか教育実習生として私の原点・SISに帰って来るとは。2011年3月に卒業した時点では夢にも思っていないでした。もともと本当に軽い動機で大学の教職課程を履修し始めた訳ですが、だんだん勉強を進めていくうちに、目の前にいる人間の成長や変化に直接影響を与えられる教員に魅力を感じるようになりました。また、国内の中学・高校の英語教育を知り、SISの英語教育は本当に希少でレベルが高いと再確認し、日本の英語教育は変わるべきだという意識をもつようになりました。実習を経て、これらの意識が確実に高まったことは言うまでもありません。

実習中、日々の授業計画・準備などに加え最も大きなチャレンジだったのは、英語がビギナーレベルの生徒が新しい範囲を理解できるよう、英語だけで授業を進めることでした。Ms. Nambaの7・8年生向けクラスを3つ担当しましたが、これらのクラスはその後の生徒の英語力の伸び方や英語に対する興味・やる気に大きな影響を及ぼすと実習前半に伺い、私自身ネイティブスピーカーでない上に教えた経験はゼロ、関西一のTOEFL平均スコアと認定されたことを踏まえ、大きな責任感を終始感じていました。授業は数10分のアクティビティなど含め全部で10回ほどという多い回数を担当させて頂いたにも関わらず、更に場数を踏んで反省・課題点を活かす機会があったならというのが本音です。Ms. Nambaの厳しく丁寧なフィードバック、協力してくれたクラスのみんな無くしてここまで向上心を持って日々臨めませんでした。「わかりやすかった!」と言ってもらったこともあり、涙がでそうなほどその言葉に救われました。また今回「教える」という立場でSISにいたことができたことは貴重でした。日々の学校生活、とくに学ぶことに対し貪欲、真面目、かつポジティブな生徒、恐れずしっかり自己表現できる生徒が本当に多いことに日々感心でした。4年間大学に通って色々な学校の話を書いても、SIS生はやはり特別だと思います。今後ますますそんな生徒たちがのびのび過ごせる環境が変わらずありますように。

いつもパワフルに授業に参加してくれた7S、7S+、7/8iのクラスのみんな、ホームルームの9年2組のみんな(毎朝出席や配布物に追われながらいつもバタバタでごめんね!）、授業外でも仲良くしてくれた生徒のみんな、Ms. Namba(the best advisor I could ever ask for)、応援してくださった先生方に支えられ、3週間で駆け抜けることができました。本当にありがとうございました。



SISに戻ってきて

竹尾麻子

SIS18期(2011年度)卒業生

私は9/29から3週間、教育実習生としてSISに戻ってきた。まず初めは3週間担任としてお世話になる7-4との顔合わせ。賑やかで楽しそうなクラスというのが7-4の第一印象であった。案の定、彼らは私にたくさんの楽しい時間を与えてくれた。授業の時間は色々な種目のPEの授業に参加し、たくさんの生徒と交流することができた。

そうしてよいよ私が行く初めての授業の日を迎えた。それは保



生徒たちに囲まれる上原さんと竹尾さん

健である。やはり初めは緊張したが、クラスに入ってみると、他の授業で出会った生徒がたくさんいて、安心した。自己紹介をする、とてもあたたかく歓迎してくれた。私のつたない授業も一生懸命聞いてくれて、本当に生徒に助けられた授業だった。初めての授業は成功した訳ではないが、私自身はとても楽しくできた。

初めの1週間が過ぎ、そこからはとても早かった。毎回一番準備に時間のかかる保健も生徒たちのおかげで、どうしたら皆が楽しんでくれるのかを考えながら準備するのはとても楽しかった。そして他の授業も始まった。バスケの授業では、シニアの皆が私の考えたメニューをととても楽しんでくれた。唯一経験のないバスケで最初は不安もあったが、毎回生徒たちが楽しんでくれるので私も本当に楽しかった。保健とは違う難しさもたくさんあったが、何より生徒たちの笑顔がたくさん見れたことが私の原動力となった。スポーツを通じて生徒が笑顔になる姿は、体育教師としてとてもやりがいを感じる部分だと感じた。特にこの学校の生徒は向上心が強いのでとても教えがいがあった。もちろん授業だけではない。私は放課後の部活は、HS Girls VolleyballとMS Girls Soccerを教えていた。ここでも皆の向上心は素晴らしかった。皆積極的にアドバイスを求めてきて、上手になりたいという気持ちが伝わってきた。皆は当たり前のようにやっているが、自分から行動を起こすことは簡単なことではない。この学校の教育がこのような生徒たちを育てているのだろうと改めて感じた。最後は7-4の皆が色紙やプレゼントをくれたり、12年生の何人かがお別れパーティを開いてくれたりと本当に終わって欲しくないと思ったが、とても楽しい3週間が終わった。

この学校は本当に素晴らしい学校だと思う。教師になるために大学で教育について学び、改めてこの学校の素晴らしさを知らされた。時には学校が楽しくないと思うことや何もやる気が出ないこともあるだろう。私自身も周りの個性が強すぎて自分を見失っていたような時期もあった。でも大学に入って一番思うことは、SISでの時間はとても尊いものであり、2度と戻って来ないものであること。毎日が濃く、色んなことが起こり、最高の仲間たちと一緒にいれる時間は本当に中高の6年間が一番強く残る時間であるということだ。将来のことももちろん考えなければいけないが、まずは今を精一杯過ごして欲しいと思う。卒業する時に、「色々あったけど楽しかった」と思えるような時間にするために、自分や他人に妥協せず、夢中で毎日を過ごして欲しいと私は思う。

SIS 木田真理子さんからの手紙

卒業生の木田真理子さんから手紙をもらった。私宛になっているが、彼女の5リスペクトや学校に対する思いが綴られているので私が独り占めするのはあまりにももったいない。木田さんの許可を得てここに公開させてもらうことにした。(SIS校長眞砂和典)

◇

眞砂先生

ご無沙汰しております。千里国際(SIS)卒業生で、2014年5月にバレエ・ブノワ賞を受賞しました木田真理子です。今、夏の休暇でスウェーデンより帰国しています。日本にもどってから、家族、友人、そして知り合いの方々が集めてくれたブノワ賞受賞に関するニュース記事を読むことができました。

眞砂先生にはメディアからの取材の申し込みなどでご迷惑をお掛けしたと思います。対応して下さい、とても感謝しております。どうもありがとうございました。また、眞砂先生より実家に電話をいただき、私の情報公開の範囲を心配して下さいたことを家族より聞きました。それを知って、千里国際で育ち本当に良かったと思いました。生徒を(卒業生も!)一人一人大切に下さり、どうもありがとうございました。私はブノワ賞をいただいてから、これまで以上に忙しくなりました。取材などの対応で戸惑うことも多々ありますが、日本で多くの方々に喜んで頂き、本当に嬉しく思っています。

先日(8月1日)、母校の大学において「木田真理子先輩に聞こう! 世界とわたりあうスピリッツ」というトーク企画があり、初めての講演を行いました。その際に、世界を舞台に仕事で成功するにはどうしたらいいか、どうしてきたか、という質問を学生から受けました。私はその際に、千里国際で学んだこと、特に「5つのリスペクト」を実行していると話しました。これまでいろいろな事がありま

たが、「5つのリスペクト」は私の大切な拠り所となっています。仕事、人間関係、私生活など上手くいかない時はいつも「5つのリスペクト」を思い出し、これらすべてが出来ているか自問自答して、乗り越えてきました。そして「周りに助けってもらわないとチャンスは巡ってこない。周囲の人たちと信頼関係を築き、相手をリスペクトする事が大切」と話しました。改めて千里国際で学んだ事が私の人生の柱となっていることに気がつきました。

中学・高校というとても大切な時期に千里国際で学べた事は、私の宝です。世界で活躍する事ができているのも、この学校で学べたことが大きいと思っています。私は本当に恵まれています。そのことを忘れず、これからも感謝の気持ちをもって、一步一步前進していきたいと思っています。また、ブノワ賞のときのように素晴らしいニュースを届けられるよう、頑張っていきたいと思っています。いろいろとありがとうございました。

2014/08/03

木田真理子



木田真理子さんプロフィール

スウェーデン王立バレエ プリンシパルダンサー。2014年ロシアのブノワ賞、イタリアのレオニード・マシーン賞を受賞。2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会顧問に任命された。文化庁長官表彰(国際的芸術分野)、箕面市長表彰を受けた。ウェブサイト <http://marikokida.com/>

SIS 学校茶道合同茶会に参加して

鳥居菜乃佳、増田晴
SIS11年

蝉も鳴き始めた今年の7月下旬ごろ、この学校の代表として裏千家学校茶道合同茶会に参加させて頂きました。茶道を始めてまだ一年も経たない私達が、突然お客様の前でお点前を披露することになり、稽古を重ね会場へ向かいました。お点前や半東(道具や掛け軸を説明する役)の台詞を何度かの稽古で覚えましたが、納得のゆく稽古が存分にできたわけではなかったのです。私達は不安と緊張でいっぱいでした。

当日は最初に大学席へ入り、大学生の方々のお点前を拝見しました。そのお点前は手先までとても丁寧で、見習わなければならない先輩だなと感じました。またお点前の道具の中には透明無色のガラス製で、中のお抹茶が見える仕様になっていた棗があり、とても素敵で印象深かったです。

次はいよいよ私達の番で、他校のお点前を拝見した後私達は交代でお点前と半東をしました。お点前をしたときは緊張のあまり動作の順やお道具を置く場所を間違えてしまったり、手が震え、茶杓を落としてしまいそうになりました。また半東では、大学生の方々のように、間違えても落ち着いてゆっくり話

す...と考えていたものの、いざとなると思うようにはいきませんでした。しかし、半東後のお道具の拝見での質問に回答できたので、これは達成感がありました。全体を振り返ってみると、ただただ緊張していたお茶会でした



が、何とか無事に終えることができ、本当にホッとしました。

今回の合同茶会に出席することによって、茶道は細かい動作や目的まで、全てが日本の思想や文化の象徴だと改めて感じる事ができました。他人への思いやり、いかにお客様をもてなすか、などの日本人の風習ありありと見えるように思いました。私達もそれを把握していたつもりでしたが、会場の静まった空気に負けてしまったと感じる部分もあります。けれど失敗した事も含め、とても良い経験となったので、参加できたことをありがたく思います。

SIS 9年生学年旅行滋賀県へ

中村亮介

SIS9年学年主任、社会科

今年の9年生の学年旅行は滋賀県、彦根、長浜、竜王に行きました。秋学期に入り、旅行委員を各クラスから募り10名の委員が決まりました。今年の旅行のテーマは「団結力」学年みんなで何かを成し遂げていく、というテーマのもとに日本旅行の藤澤さんのアドバイスもいただき場所選定から始まりました。

旅行社からの提案をもとにいくつかの候補地を絞りプリントを作成し学年各クラスでプレゼンを行い、場所を決定しました。

一日目の彦根では、「彦根スカイアドベンチャー」というアスレチックを利用して団結力の構築を図りました。事前にインストラクターの方から「一步踏み出す勇氣」、「三つのわ」のお話をいただき、ハイエレメントと呼ばれるプログラムで地上8mあまりの高いところへハーネスを身に付けて、命綱をつけて足元がゆれている吊り橋のようなものを渡ったり、曲芸のような綱渡りをやったりと、体力と気力が必要とされるプログラムでした。上手いいかない仲間に励ましの声をかけあったり、手助けをしたりと、多くの中高の学生を受け入れて指導している現地のインストラクターの方もSISの生徒みんなの協力する姿を見てとても感銘を受けていました。

もう一つのプログラムはローエレメントと呼ばれるプログラムで、インストラクターの指示のもとグループでいくつかの問題を解決するものです。例えば、全員で手をつないだままで輪をどのようにくぐるか、その時間を短くするにはどうしたらよいかグループで話し合いながらより良い解決法を見つけながら進めていくもので、最後にインストラクターからの評価をもらうものです。

団結力やグループとしてのまとまり、助け合いの精神が必要となり養われていくものです。

一日目のこのプログラムが終わった後の生徒のみんなの表情は開始前よりもこやかになっていたように思えました。

夜は長浜ロイヤルホテルに宿泊し夕食の後、旅行委員が企画、運営したチームビルディングのゲームを楽しみました。学校から持参した裏紙を使っていかにチームで協力し合って出来るだけ高い紙の塔を作れるか、各チーム色々な意見を出し合いながら塔を作っていました。

二日目は、まず彦根城を見学しました。日本に現存する当時のままを残した約10の城郭の一つです。ひこにゃんにも会うことが出来た生徒もいたみたいです。

そして、この旅行のもう一つのメインイベント、オリエンテーリング。竜王にある滋賀県の希望ヶ丘文化公園内の施設を使って、各グループ広い敷地内をコンパスと地図を頼りにポイントを探しました。起伏が多くあったり池や水たまりもあって、足を滑らせて水に靴をつけてしまった人、お尻が泥だらけになってしまった人など色々でした。全グループが無事にポイントを見つけ、スタート地点に戻ってきました。みな一様に疲れていたようですが楽しんでオリエンテーリングを終えたようでした。

全体的に今回の旅行は天候にも恵まれ、2日間の生徒のみんなの表情や様子を見るととても楽しんでいたようです。そして、10人の旅行委員のチームワークで企画運営がスムーズに行っていたように思えました。

団結力、チームビルディングが達成できた旅行だったと思います。



村嶋里音

SIS9年、旅行委員長

今年の学年旅行のテーマは、チームビルディング・団結力でした。ただ楽しいだけの旅行ではなく、全員で何かをやり遂げられるようなものにしたいと思っていたからです。やるときはやる、そんなこの学年に団結力があれば今回の学年旅行だけでなく、これからの様々な行事をもっと楽しめると思いました。そのため、旅行委員同士も団結してより良い学年旅行にする努力をしました。しかし、あくまでこの学年旅行は旅行委員が勝手に進めるものではないので様々なアンケートなどを行いより多くの声を取り入れ、学年全員でつくり上げたとても意義のある学年旅行だったと思っています。

この学年旅行のメインプログラムでもあるオリエンテーリングでは、団結力を高めることができました。地図とコンパスだけを用いていくつかのポイントを巡り、点数を稼ぐので、話し合いが必要不可欠でした。お互いを信頼して協力しなければいけないので、団結することができました。

そして、この学年旅行で団結力以外にもたくさんのことを学びました。彦根スカイアドベンチャーでは、地上8mにあるアスレチックをお互いに励まし合いながら進んでいき、その後、いくつかのゲームの目標を各チームごとに協力して達成しました。この活動を通して、「一步踏み出す勇氣」と「三つのわ」を学びました。この言葉はスタッフの方が言っていた言葉で、私の頭に強く残っているものです。「一步踏み出す勇氣」の意味は、誰かとともに一步踏み出すのではなく、一人ひとりが自分自身で勇気を振り絞ってやり遂げるもので、それぞれが一步踏み出したと同時に成長することができたと思います。次に、「三つのわ」というのは、一つ目が輪、二つ目が会話の話、三つ目が平和の和というものです。チーム全員が輪には入り、コミュニケーションを十分にとってたくさんの意見や考えを言い、話し合う。そして相手の立場や気持ちを考えてお互いを思いやり、調和を保つ。これはチームで協力するためには、一人ひとりが心がけなければならないことです。そのため、「三つのわ」から人と協力することの大切さを改めて気づかされました。

この学年旅行を通してこの学年のいいところが増え、より磨かれていくといいなと思います。学年全員でつくった学年旅行だからこそ、いつまでもみんなの心に残り思い出として残っていてほしいです。

OIS ロボカップジュニア世界大会準優勝

OIS10年生のユング開さんが7月21-23日にブラジルで行われたロボカップジュニア世界大会「レスキュー」分野セカンダリーの部で準優勝しました！ロボカップは1997年に始まった大会で、「ロボカップサッカー」「ロボカップレスキュー」「ロボカップジュニア」「ロボカップ@ホーム」の大きく分けて四つの部門があり、40ヶ国以上の国の選手が出場します。そんな大きな大会に参加した開ユングさんに話を聞いてみました。

Q.ロボットを作り始めたきっかけは何でしたか？

A.小学校のころから通っていた地元の「科学の学校」という所の布柴 新(ぬのしば あらた)先生に誘われたことです。それから五年間ずっとロボカップジュニアとWRO(World Robot Olympiad)に出場しています。

Q.どんな「レスキュー」をするロボットを想定して作りましたか？

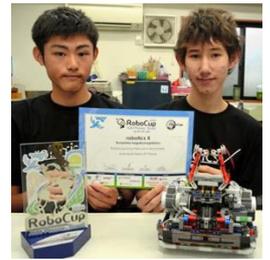
A.「レスキュー」というのは競技のテーマです。ロボット自体は2014年ルール(人が遠隔操作をしない自律制御型であることなど…)をクリアできるように作りました。しかしテーマにはそうように安定して確実にルールをクリアできるロボットを作成しました。



Q. 立命館高校1年生の浅見幸悠紀(こうき)さんとの参加でしたが、チームについて教えてください。

A. 去年のWROの大会では相

方がいなかったのと同じ科学実験教室に通っていてロボット経験のある幸悠紀(当時WRO中学生部門世界二位)とのチームをコーチである布柴先生が作っていただきました。幸悠紀はロボカップには今年が初出場だったので、ロボット作りなどでいろいろと四苦八苦していましたが、世界大会までにはとても成長して、Brazilではとても相談しあったり問題に向き合ったりできた最高の相方でした。



Q.今回の大会でうまくいったところ、苦労したところを教えてください。

A.今回僕たちのチーム「robotics X」はセカンダリー部門に出場しました。セカンダリー部門には15~20歳の選手が出場するので、僕たちは最年少のチームでした。それもあってか前回僕が出場したロボカップオランダ大会のプライマリー部門(15歳以下)よりも他のチームのレベルがとても高かったです。ロボットは基本的にはうまくいっていたものの、コースが難しいということに加え、世界大会では本番のフィールドで練習ができないので、「練習」と「本番」での環境の違いがミスを生みました。

ユング開さん準優勝おめでとうございます！これからもロボット作り頑張ってください。

(Student reporter M)

OIS IB Results

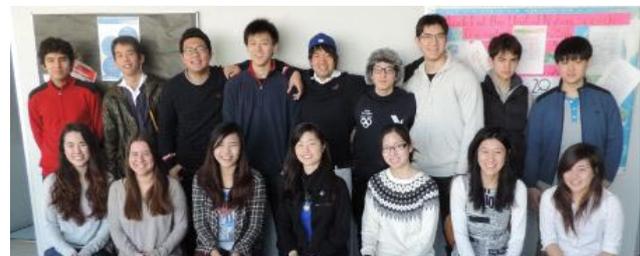
OIS IB RESULTS TO WRITE HOME ABOUT!

Miyuki Endo

IBDP coordinator

At the beginning of July, IB students all over the world eagerly, impatiently or anxiously awaited the results of their May exam session and so did the 17 OIS IB candidates. They were not disappointed. The class of 2014 cohort can be proud of one of the best set of results in OIS IB history. All our students were awarded the diploma achieving a 100% passing rate. They did so with excellent marks and a subject average above the world wide average: the school average was 35 points while the worldwide average was 29.81 points. The OIS all subject score was 5.62 points, which is 0.43 points up from the previous year. These results are all the more impressive, because unlike some other schools, we encourage all students to tackle the full diploma and refuse no one. It is also noteworthy that seven of those students received the prestigious Bilingual diploma, for which they needed to complete two Language A courses.

We are so pleased with these very positive IB results, not only because they make the school proud but also because they open up excellent prospects for our students' future. All



of them got in their first choices of university and were accepted by a wide range of colleges because of their successful IB results. What is more, we can be confident that they will do well in the studies they have chosen: Research shows that DP students are 'better prepared for college on both academic and non-academic factors' (Conley et al., p. 5) and are 'more academically adjusted to the rigour and expectations of college' (Id.).

We hope that the class of 2014 will be a source of inspiration for their successors in the present junior and senior year and a challenge to do equally well. The new IB year is indeed already well under way!

■ 学年だより Grade Reports

●SIS Grade 7 中等部1年生

彦坂のぼる

SIS7年担任、英語科

入学して初めての長い夏休みはいかがでしたでしょうか。あまりに長くどう過ごせば良いのか、という質問を保護者様からも受け、7年生ではHRで時間を設けてひとりひとりに目標と計画を立ててもらいました。また、中学生が応募できる作文や絵画、IT関係のコンテストなども紹介しました。しかし休み明けに聞いてみると、有意義にそれらの情報を使った生徒もいる中で、残念ながらもなかなかうまく利用できなかった生徒も多くいたようです。

SOISでは自律した人になるための教育をととても大切にしていますが、夏休みもそのための大きなチャレンジなのかもしれません。上級生が企画運営する夏のキャンプは、そんなチャレンジに立ち向かう準備とも言えるでしょう。きっとここで7年生たちは、自分も高校生になったらあんなふうになりたい、という気持ちを持ったことと思います。楽しいながらもしっかりとした企画をし、安全に気をつけながら、かつ優しく下級生のお世話をし、多くの上級生が協力してリーダーシップを発揮していく姿は、まさに7年生が目標としてほしいものです。そして、どうしたらあんなれるのだろう、と考える機会を与えてくれるものだったと思います。

この学校には、たくさんの機会があふれています。多様な授業、OISとの関わり、クラブ活動、生徒主体のHR活動、生徒会、東日本大震災の支援センター、コンテストの紹介などなど、少したくさんあり過ぎて、一度にするには取捨選択が大変なくらいですが、上級生は、こういった事柄の多くを経験する中で、あの夏のキャンプを企画運営する力を育てていっています。夏休みや冬休みを有効活用する生徒も多くいます。7年生を見ていると、学期中にいろんなことにチャレンジする、という点については多くの生徒が取り組みを始めているように感じます。初めての夏休みはなんだかどんな風になるのか想像がつかない生徒さんも多かったことと思いますが、次の長期休暇は、秋学期磨いたチャレンジ精神の推進力をそのままに、有意義に過ごしてもらえようと願っています。



山田優介

SIS7年担任、数学科

ついにこのような日が来た、というのが今の率直な感想！ 何の日かって？ それは、自分がインターカルチャーの文章を、担任団の一人として書く日のことです。

ご存知の事と思いますが、私は96年3月にここSIS(当時はOIAと言っていました)を卒業しました。インターカルチャーは私が生徒だった時からずっと続いているもので、今回この文章を書くにあたり、長い間インターカルチャーの編集の仕事をしている馬場先生にその歴史を聞いてみました。第1号は1991年10月にB4裏表印刷された1枚の紙の間にB51枚を挟み込んだ分だったそうです(現物、見せて頂きました！ 歴史を感じます)。生徒の時代からインターカルチャーを楽しみに読んでいたので、自分がその文章を書くということが何とも不思議な感じがします。当時はほぼ毎月くらいに発行されていて、ページ数は今ほどなく、用紙は学校で印刷したものでした。正確には覚えてませんが、高校生くらいからのインターカルチャーは今のサイズと同じで、ページ数はもう

少し少なかった印象があります。そして4、5年位前からはカラーになったとのことでした。インターカルチャーの学年通信欄などには、その時の学年の様子や、担任の先生方が感じている事などが書かれていて、いつも何が書いてあるのかと楽しみにしていました。学年通信欄以外のところにも当時の担任の先生が通っていた高校での思い出などが書いてあり、生徒の立場として読んでいたインターカルチャーは本当に「楽しい読み物」だった事を覚えていています。

そして、立場が変わって7年の通信欄を書くことになったのですが、いざ原稿の依頼を受けて書こうと思い始めるとどのような話題だと読んでいる立場としては楽しいのか、どのような文章だと興味を持ってもらえるのかといった悩みが生まれました。卒業生の立場として感じる事を書いた方が楽しいのか、7年の担任の立場で最近の出来事を書いた方が楽しいのか、または今自分が伝えたいと思うことや今のSISの生徒を見ていて感じていることなどを書いた方が良いのか、との悩みの日々が始まり……。今のSISの生徒を見ていて伝えたいことを書きだすと、何だか自分は「ああしなさい」「こうしなさい」と色々な注意・忠告をする『お説教おじさん』になってしまいそうで、そんな事は読んでいても楽しくないだろうなあ、と思いつつも、最近みんなに言いたいことの1つとして学校の備品を大事にしようよ、机の落書きはやめようよ、と言いたくなる今日この頃。教室の電気と空調くらいは最後に教室を出る人が消すようにしようよ、なんて事も感じています(消灯・省エネおじさんとして点きっぱなしの電気と空調を見るとせせせと消えています)。別に電気を消したからといって何も自分が得をするわけではないけれど、でもそういうところにも目を向けて、気づき、環境に配慮が出来てちょっと消灯をして教室を出るくらいの事を心がけられる生徒の集団であって欲しいなあと思って思いながら過ごしてきた半年でした。

この学校の教員になってから早くももう半年が過ぎました。そして、7年生もこのSISに入学して、早くも半年が過ぎました。本当に月日の経つのは早いものだ実感する日々を送っています。前任校でも12年勤めていましたが、過ぎてみれば本当にあっという間の12年間でした。ついこの間中学1年生の担任として迎えた入学生達が今ではもう大学1年生、時々あちらこちらの場面で活躍している話を聞くたびに嬉しく思っています。また最初に受け持って6年間持ち上がった生徒達も今では社会人3年目、同じ教員になって活躍している人もいます。

今年SISで新しく迎えた7年生達もあっという間に卒業し、卒業生として連絡をくれる日々が来るようになるのかとも思うと、1日1日の関わりを大事にしなければと思う毎日です。7年生には、あっという間に卒業の時を迎えるだろうから、このSISでの学習環境を大切にして、そして時間を大切に過ごしてほしいと伝えていますが、7年生のみんなにとってはまだ始まったばかりの学園生活ですが、卒業の時には入学時と違ってここが成長した、といえるような日々を送って欲しいと願っています。共に頑張ってお互いにとって楽しい学園生活を作っていきましょう！



●SIS Grade 8 中等部2年生

山城亜希子

SIS8年担任、国語科

食欲の秋ですね。そのせいかなぜか私は、この季節になると「桃栗三年柿八年、柚子の大馬鹿十三年」という言葉を思い出します。桃や柚子が入っているのですから、特にこの季節に限定された言葉でもないはずなのですが、栗・柿の印象が強いのでしょうか。もしくは、秋という少し緩やかな気分になるこの季節が、慣用句などというものを思い出すのに適した季節なのかもしれません。

文化庁の国語世論調査では、「情けは人のためならず」などの慣用句が、年々本来とは異なる意味で使われるようになってきている、との事ですが、この言葉に関しては、そういった心配はまだないようです。もっとも、実は後半は母が強く主張しているのを感じただけで、他にも「ウメ」やら「枇杷」を使ったものが諸説あるようなのですが、私は耳慣れたこの表現を愛用しています。

この慣用句は、広辞苑を引いてみると、「芽生えの時から、桃と栗とは三年、柿は八年たてば実を結ぶ意。どんなものにも相応の年数があるということ(第6版)」とあり、何かに取り組んだとき、すぐに結果を求めたがる人間のサガを戒め、「まずは地道な努力が大切」と考えるべき時の言葉として良く登場します。

突然ですが、ここで日常生活を思い返してみてください。「何で1日は24時間しかないわけ?」「これとそれとあれをやらなくちゃなのにつ」と思い、その「これ」「それ」と「あれ」の中には必ず「こんなことやって何の役に立つわけ?」と思うことが含まれていますよね。

けれどもそういう日々の中で、ごくまれに「何で私こんなこと知ってるんだろ。出来るんだろ。あれれ?」という時がありませんか? 私はあります。逆に「何であの時やっておかなかったんだろ。何であの子はできるんだろ。羨ましすぎる!」と言うこともありませんか? 私はあります。これはどちらも、自分がどれだけ「役に立たないこと」をこなして蓄積してきたかによるのではないかと考えます。物事には、やっている時点では「役に立たなく」ても、いつか何かに役立つことがあるということなのでしょう。

「今やっている事は無駄なことじゃなくて、いつか花開くはずのこと」と思いながら日々を過ごしていければ素敵だなと思う、今日この頃です。

●SIS Grade 9 中等部3年生

The Bridge Between Middle and High School

Frances Namba

SIS Gr.9 HR teacher, English

This is a very busy trimester for the grade 9 students. On top of all the regular classes, clubs and activities, we also have two big events to get ready for: the Sports Day and the school trip. Both events require the students to cooperate, to be organized, to show leadership and to show respect for the ideas of others. The "iin" have been working very hard, knowing that it is for the benefit of the grade as a whole and that they will sometimes have to give up their chances to play or get what they want in order to make things work for others. On behalf of all the grade 9 students and teachers, I would like to say a big "thank you" to them all. I'm sure their efforts will be rewarded with two successful events and special memories that everyone will keep with them for a very long time.

Students seem to be getting used to this in-between year, where they are crossing the bridge between middle school and high school. From this trimester they are joining high school sports clubs and are getting used to being the youngest, least experienced in the group again. In Sports Day, they are working as a grade rather in houses for the first time and will be competing against the older students.

Another difference is that students no longer receive progress reports in the middle of each trimester. I have heard some people say that they miss having these reports as they don't have a clear idea of how they are doing in their classes. My response to this is please go and talk to your teachers whenever you have a question or want some feedback on how you are doing. We are always happy to discuss your progress with you and to give you advice on what you need to do to improve.

I cannot emphasize enough how important it is to be an active learner, to take responsibility for your own learning and development and to take advantage of any chances and opportunities open to you. Teachers are here to help and support you, but you are the ones who must take the initiative and make the most of the resources available to you. This will be even more important next trimester when you begin choosing your courses for the first year of high school and have to take even more responsibility for your learning.

You are taking the first important steps to being a high school student. Don't forget that we four homeroom teachers are here to help you on your way and are watching your progress carefully!

●SIS Grade 10 高等部1年生

Mark Avery

SIS Gr.10 HR teacher, English

In the same way that his victory at Wimbledon influenced far more than the game of tennis, the following words from Arthur Ashe have implications far beyond the realm of sport. "You are never really playing an opponent. You are playing yourself, your own highest standards, and when you reach your limits, that is real joy." I heard these words from a coach when I was an aspiring John Newcombe and remembered them the other day as I watched the grade 10 students practice their performance for sports day. With the focus at our sports day being on enjoying sport, being involved and extending yourself, it is another opportunity to discover new talents, develop leadership and have a go at pushing yourself to be better. Some students had obviously never danced before but they were right there with the leader, listening intently, copying every move and improving with every cry of, "Okay, one more time, from the start!" I loved watching these kids, the ones that aren't necessarily the best at it but who are having the most fun learning. They aim high and enjoy the rewards that come with making progress, making it fun and making sure they do their best. They are not thinking about beating every other grade on sports day. They are simply there to have fun and work hard to be a valuable part of the team. They show amazing respect for leadership and

great team spirit. I hope those students I was watching this afternoon have a fantastic sports day and that the rest of the team appreciates the difference they will most certainly make to the performance. In addition, I am confident it is those very same students who will carry that attitude with them for life, aiming to find the fun in challenges, aiming to make a difference and aiming to be the very best at what they do. I hope they enjoy sports day and that the effort they put into it contributes to the success and the real joy they experience in life.

I also want to thank the students who volunteered to take leadership roles this year.

Heads: Allen Morimoto, Naoki Yomogida, Rina Fujiwara

Sign up: Ikuko Oda, Risa Akiyama

Performance: Risa Akiyama, Konami Okada

Cheering/Poster: Keita Morimoto, Marino Takamiya, Emi Hashizaki

T-Shirts: Mari Ito, Rina Hariu

These students acted very responsibly and did an excellent job of involving as many people as possible. More leaders emerged as preparations advanced and while I can't list everybody's name here, I want to thank them too.



大学1日体験

山本靖子

SIS10年担任、英語科

スポーツデイが延期されてしまった翌日の10月14日、予定通り10年生は「大学1日体験」と題し、1日かけて関西学院大学を訪問しました。目的は大学生活の1日とはどんなものかを実際に体験し、今後の進路を考える上での参考にしてもらうということにありました。今年度は初めての試みとして、SISの生徒用に用意された講義を全員で聴くのではなく、実際の大学の授業に他の関学生に交じって参加させていただくという形をとりました。事前に大学側から提供された授業リストから授業を個々に選択し、2つの授業に参加しました。90分授業に、チャペルアワー、学食での昼食、授業ごとの大移動、実際の大学での授業の様子を実際に体験することができたことで、それぞれ色々と感じることがあったと思います。授業は、わかりやすいものから、難解なもの、単純に面白かったり、興味深かったり、それぞれだったようですが、その中で全体についてのコメントとして良く聞かれたのが「自己責任」ということばです。学ぶことも、学ばないことも、チャンスを活かすことも、活かさないことも大学では個人にかかっている、それを実感した人が多かったようです。今回のそれぞれ一人ひとりが感じたことを今後の進路を考える上での参考にしてほしいと思います。

●SIS Grade 11 高等部2年生

青春は楽しくて、苦しい

水口 香

SIS11年担任、英語科

11年生はこの秋、5名の編入生と12名の留学帰国生を迎え、総勢84名の大所帯になりました。11-1に深牧仁美さん、11-2に木村彩愛さんと岡晃平君、11-3に井出菜々子さん、11-4に劉夏希さんが加わりました。

11年生の皆は、高校生活のちょうど中間点になり、多面で活躍する姿がよく見られるようになりました。夏のキャンプ、秋学期開始

後は、スポーツデイ準備、学年旅行企画、クラブ活動、生徒会・生徒議会、オーストラリア留学生のバディー・・・と数え切れない程、いろいろな場面で重要な役割を担っています。これに合わせて自然と、声の張り、風貌が変わってきたように感じます。今までは下級生として上級生に頼ってきましたが、今度は上級生として、先々のことを予想して準備や指示をしています。また横同士の連携プレーも欠かさず、互いの意見を尊重し、手を取り合って数々の成功を収めています。知識・知恵を駆使し、神経をめぐらせ、ありとあらゆる方法を尽くしてより良いものを作り出そうとする行動はすばらしいです。

スポーツデイが終わると、そろそろ将来について考え始めなくてはならない時期に入ります。将来について考えるきっかけをたくさんもらっても、決めるのは自分自身。大きな希望と不安の狭間で不安を抱える人は少なくありません。毎日が楽しくてどうしようもない、けれど将来のことを考えるとちよっぴり苦しいのが青春の証。諸活動で見せる力を自分の未来設計にも活用してほしいと思います。他人だけでなく、自分のためにも、力の限りがんばってください。

●SIS Grade 12 高等部3年生

宗正久志

SIS12年担任、社会科

気が付けば、SOISでの生活も残すところ冬学期だけです。

皆さんの日常にも「最後のSports Day」「最後の部活」「最後のクリパ」と何でも「最後の～」が付いてきて、卒業をイヤでも意識してしまう日々でしょうか？

その「最後の○○」シリーズ、是非、楽しんでほしいです！

と、同時に「SOISに最後に何ができるのか、最後に何が残せるのか」ということも考えてほしいと思います。

もしもあなたがSOISが好きなら、SOISで色んな事を学んだと感じてくれているのなら、今度は「SOISへ何ができるのか」を考え、実行に移してほしい。

僕は決してそれは「何か大きなことをしよう」と言っているのではありません。むしろ、身の回りのできることを探してほしいのです。

個人個人、忙しいのも知ってるし、1学期でできることも限られている。だから1つでもいい、何ができるかを考えて、それを達成してほしい。

Be an Informed, Caring, Creative Individual Contributing to the SOIS Community!! \ (^o^) /

SIS秋学期帰国生

入学広報センター

《 国別 》		《 学年別 》	
アメリカ	6	7年生	2
オランダ	2	8年生	3
中国	2	9年生	2
オーストラリア	1	10年生	2
タイ	1	11年生	5
ドイツ	1	計	14
マレーシア	1		
7ヶ国 計	14		

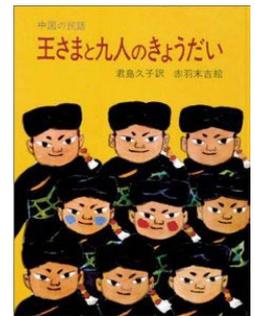
箕面世界子どもの本アカデミー賞

青山比呂乃
図書館

皆さん、箕面市内の小中学生全員が選ぶ、今年1番面白かった本に与えられる賞があるのを知っていますか？ ハリウッド映画のアカデミー賞になぞらえた名前のついたこの賞は、しばらく前から、箕面市内の小中学校の生徒が全員参加して行われてきました。6月にSOISでは、小中学生の希望者のみの投票とした結果、今年は投票したのは、OIS小学1年14名、OIS小学3,4,6年20名計34名でした。市内の学校での投票の結果、下記のように受賞作が決まり、受賞作家・挿絵・訳者への通知がされています。主演男優賞のグレッグだけが、SOISでの投票結果と一致しています。今回の受賞作やその他の候補作の本は、まだ図書館内に展示していますので、いまからでも是非読んでみてください。

2014年度受賞作

- ▼絵本賞:「王さまと九人のきょうだい」
君島久子訳 岩波書店
- ▼作品賞:「ぼくらの七日間戦争」宗田理作 ポプラ社
- ▼主演男優賞(男の主人公):「グレッグのダメ日記」(グレッグ)ジェフ・キニー作
中井はるの訳 ポプラ社
- ▼主演女優賞(女の主人公):「かあちゃん取扱説明書」(かあちゃん)いとうみく作 佐藤真紀子絵 童心社
- ▼YA(ヤングアダルト)賞:「都道府県の持ちかた」バカリズム著
ポプラ社



SOIS Mathematics Contest will be held

Sponsor: OIS and SIS Math Department

Date: The end of November (TBA)

Venue: (TBA)

All questions will be in English. The difficulty will be Gr.9 to partly Gr.11 level.

The best performers will be awarded.

High achievers will qualify to participate in the AISA Math Competition (in Beijing on 30-31 of January, 2015), but participation is not mandatory.

Prepare from now if you'd like to enter. Entry is free.

You can see sample questions here

<http://www.amt.edu.au/wuamc.html>

For details; ask your math teacher

SOIS数学コンテストを開催します

主催: SIS & OIS 数学科

日時: 11月末(追って連絡)

場所: (追って連絡)

出題は英語で行われます。範囲は中3から一部高2程度までです。

成績上位者は表彰されます。

上位からAISA Math Competition(2015年1月30-31日北京にて)の出場資格が与えられますが強制ではありません。

出場したい人は今から準備をしておいてください。参加費は無料です。

問題例はこちらです。

<http://www.amt.edu.au/wuamc.html>

詳細は数学科へ

MATH

INTERCULTURE Student Reporters 編集後記

●芸術の秋、食欲の秋など、〇〇の秋と呼ばれるものは多くありますが、皆さんはどんな秋を過ごされましたか？私は「記事作成の秋」となってしまったようです。(Arisa Iwasaki)

●今年の秋は急に寒くなりましたね。風邪ひきそうです…。みなさんも体調にだけは気をつけて…。(Mana Miyazaki)

●髪をばっさりと切りました。これでもうバツハと呼ばれることはないでしょう。しかし寒くなりましたね。風邪をひかないように気を付けてください。(Fuga Kameda)

INTERCULTURE

編集後記

今号はこれまでになく上記3名の生徒記者の活躍が目立ちました。毎週1回のミーティングもしてきました。Sports Day、7年校外学習、通年クラブ・同好会、英語弁論大会優勝、ロボカップ世界大会準優勝の記事はすべて生徒記者が作成したものです。特に最後の2つは受賞者に単独インタビューをしてまとめてくれました。一方で惜しくも没になった記事もありましたが、よく頑張ってくれました。表紙の写真も生徒記者の撮影です。今後どうぞご期待ください。(馬場博史)

◆Editor: Hiroshi Baba ◆Proofreaders: SIS AOPR Centre ◆Student Reporters: Fuga Kameda (SIS12), Mana Miyazaki (SIS9), Arisa Iwasaki (SIS7)



<SIS保護者会> 今回はカフェテリアに注目！

みんなが楽しめるカフェテリアを目指し日々奮闘中のスタッフの皆さんの生の声を聞いてみました。いろいろな課題が見えてきました。

<子どもたちにインタビュー>

子どもたちの評判は上々！

カフェテリアの好きなところ

スタッフが優しい。サービスがよい。麦茶が無料。定食のメニューが毎日変わる。みんなで楽しく食べられる。手作りのものが美味しい。アイスが売っている。

好きなメニュー

唐揚げが第一位。(揚げ物が人気)うどん。定食。手作りハンバーグ。グラタン。

追加してほしいメニュー

現在、夏季のみの冷やしうどん、そばを定番メニューにして欲しい。

<カフェテリアより>

今回お話を伺ったのは、カフェテリアの責任者で、一番子どもたちに接して下さっているスタッフの合志さんです。

- ・添加物を使わないように気をつけながら手作りし、コストダウンを考えながらもボリュームアップできるよう工夫しています。

- ・唐揚げが一番人気ですが同じものを続けて出さないようにソースを変えたりしてバリエーションを増やしています。

- ・ピザはオープンに入る量に限界があり、冷めると硬くなってしまふなど難しいメニューですが、子どもたちの人気メニューなので月に1回から2回に増やしていけたらと検討中です。

- ・フルーツの要望はありますが単品では出せないで定食に入れて対応しています。サラダバーは以前ありましたが専用の保冷機材がなく、違う種類の野菜が混ざってしまうなど管理が大変で余ることも多かったため、定食に入れて対応することにしました。

- ・プリン・ヨーグルトは手作りにしていたのですが、既製品のほうが人気で手作りは中止しました。

- ・利用時間が2部制になっているので、1部で売切れないように分けて出しています。

<カフェテリアの課題>

楽しく気持ちよく利用する子どもたちがいる一方で、コップがテーブルに置きっぱなし、食器が中庭に置きっぱなし、スプーンをゴミ箱に捨てる、食器を投げて破損する、アイスのゴミをポイ捨てるなどのマナー違反をする子どもたちも見受けられるようです(アイスのゴミがかなり多く困っているようです)。スタッフ、清掃の方も協力して回収して下さっていますが大変迷惑をかけています。

年間約半数のスプーンが紛失し、不足分の再購入費5~6万円を学校が負担しています。環境ホルモンの影響が少なく耐熱性



のある食器を利用しているため高価なこともあり、とても困った状況になっています。3年前に生徒会が食器の値段をカウンターの壁に貼り出すなどモラル向上に頑張ってくれたそうです。これからは、備品の丁寧な取り扱い、ゴミはゴミ箱へ捨てるといったマナーの向上を子どもたち自身が実践してくれることに期待したいです。

子どもたちは食事を楽しみにカフェテリアを利用しています。しかし時折お金を

忘れてくる子どもたちもいます。そんな場合には合志さんのご好意でランチ代を貸してもらい(ノートにつけて管理)次に返すことになっています。お金を忘れて泣きそうになっている子どものお腹が空いてしまい後の授業に差しつかえはしないかと心配でこんなルールを考えてくださいました。しかし、「おばちゃん、ついで！」とノートに記入しない子どもや支払いを忘れてしまう子どもも多く、その結果、合志さんが個人的に全額負担されています。

<保護者にお願ひ>

時々お子さんに声をかけてあげてください。「今日のランチ何食べたの?」「おいしかった?」「皆で使っているんだから食器やゴミはちゃんと片付けている?」そんな声かけでいいのです。そういう会話をきっかけにお金を借りたことを忘れていても思い出すかもしれません。公共の場でのモラルを自覚するようになるかもしれません。

ランチ代については、子どもたちの良心を信じて、貸し続けたいと合志さんはおっしゃっています。

カフェテリアでは意見を募るノートが2か所に設置されています。お子さんだけでなく保護者の方がたも無記名で記入してよいそうです。ぜひ、ご意見をお寄せください。またカフェテリアもどんどんご利用ください。

スタッフの皆さんは、子どもたちを温かく見守り、子どもたちに美味しく楽しく食べてもらうことを常に考え続けて下さっています。カフェテリアはなくてはならない存在です。気持ちよく利用できるカフェテリアをみんなで作っていきましょう!



各委員会へのお問い合わせアドレス

Board	sispa-bd@soismail.jp
Network	sispa-nw@soismail.jp
Hospitality	sispa-hp@soismail.jp
International Fair	sispa-if@soismail.jp
Public Relations	sispa-pr@soismail.jp